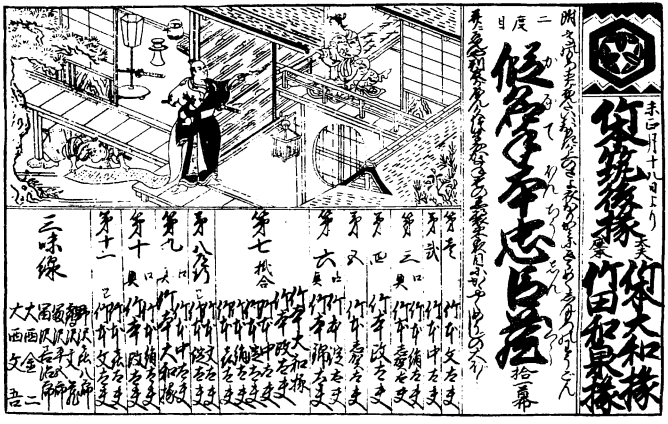
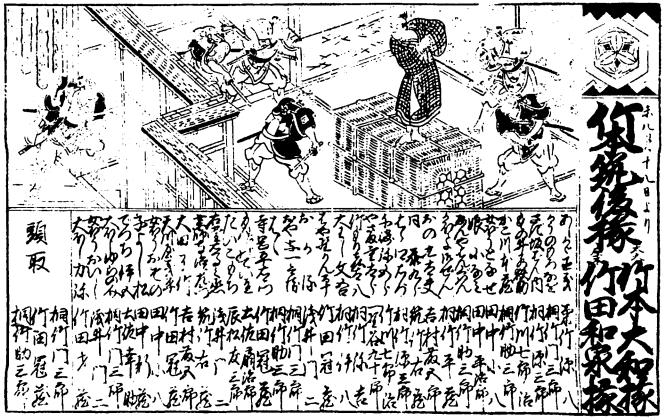
假名手本忠臣蔵

地嘉肴ありと雖も食せざればその味を知らずとは。國治つてよき武士の忠も武勇も隠るゝに。たとへば星の晝見えず夜は亂れて顯はるゝ。例を爰に假名書のオロシへ太平の代の。政。地頃は曆應元年二月下旬。足利將軍尊氏公新田義貞を討亡し。京都に御所を構へ德風四方に普く。萬民草の如くにて靡き從ふ御威勢。地國に羽をのす鶴ヶ岡八幡宮御造營成就し。御代參として御舍弟足利左兵衛督直義公。鎌倉に下着なりければ。在鎌倉の執事高武藏守師直。御膝下に人を見下す權柄眼。御馳走の役人は。桃井播磨守が弟若狹助安近。伯州の城主鹽冶判官高定。馬場先に幕打廻し ッシ威儀を正して相詰むる。地直義仰せ出さるゝはいかに師直。詞此唐櫃に入れ置きしは。兄尊氏に亡されし新田義貞。後醍醐の天皇より賜つて着せし兜。敵ながらも義貞は清和源氏の嫡流。着棄の兜と云ひながら。その儘にも打置かれず。地當社の御藏に納める條その心得あるべしとの厳命なりと宣へば。武藏守承り。詞是は思ひも寄らざる御事。新田が清和が末なりとて着せし兜を尊敬せば。御旗下の大小名清和源氏はいくらもある。地奉納の儀然るべからず候と。遠慮なく言上す。詞イヤ左樣にては候まじ。この若狹助が存ずるは。是は全く尊氏公の御計略。新田に徒黨の討洩され御仁德を感心し。攻めずして降參さする御方便と存じ奉れば。無用との御評議率爾なりと。地云はせもはてず。詞イヤア師直に向つて率爾とは出過ぎたり。義貞討死したる時は大童。死骸の傍に落散つたる兜の數は四十七。どれがどうとも見知らぬ兜。さうであらうと思ふのを。奉納したその後でさうでなければ大きな恥。なま若輩な形をしてお尋ねもなき評議。地すつこんでお居やれと御前よき儘出る儘に。杭とも思はぬ詞の大槌。打込まれてせき立つ色目鹽冶引取つて。詞コハ御尤なる御評議ながら。桃井殿の申さるゝも治まる代の軍法。地是もつて捨てられず双方全き直義公の。御賢慮仰ぎ奉ると。申上ぐれば御機嫌よく。詞ホヽさ云はんと思ひし故。所存あつて鹽冶が婦妻を召連れよと云付けし。是へ招けとありければ。地はつと答の程もなく。馬場の白砂素足にて裾で庭掃く裲襠は。長地神の御

前の玉箒玉も欺く薄化粧。鹽冶が妻の顔世御前はるか下つて畏る。地女好きの師直その儘聲かけ。詞鹽冶殿の御内室顔世殿。最前よりさぞ待遠御大儀〳〵。地御前の御召近う〳〵と取持顔。直義御覽じ。詞召出す事外ならず。往んじ元弘の亂に。後醍醐帝都にて召されし兜を。義貞に賜つたれば最期の時に着つらん事疑ひはなけれども。その兜を誰あつて見知る人外になし。その頃は鹽冶が妻。十二の內侍のその內にて。兵庫司の女官なりと聞及ぶ。さぞ見知あらんず。覺えあらば兜の本阿彌。地目利き〳〵と女には。嚴命さへも和らかに。ッシお受申すも亦なよやか。詞冥加に餘る君の仰せ。それこそは私が。明暮手馴れし御着の兜。義貞殿拜領にて。蘭奢待といふ名香を添へて賜はる。御取次は則ち顔世。その時の勅答には。人は一代名は末代。すは討死せん時。此蘭奢待を思ふまゝ。內兜に炷きしめ着るならば。地髻の髮に香を留めて。名香かをる首取りしといふ者あらば。義貞が最期と思召されよとの。詞はよもや違ふまじと申上げたる口元に。下心ある師直は。小鼻いからし聞居たる。地直義詳しく聞し召し。詞ヲヽ審かなる顔世が返答。さあらんと思ひし故。落散つたる兜四十七。此唐櫃に入れ置いたり。地見分けさせよと御上意の下侍。屈むる腰の海老鎖を。あける間遲し



と取出すを。おめず臆せず立寄つて。ハルヲシ見れば所も。名にし負ふ鎌倉山の星兜。とつぱい頭獅子頭。さて指物は家家の。流義々々によるぞかし。地或は直平筋兜。錏のなきは。弓のため。その主主の好みとて數々多きその中にも。五枚兜の龍頭是ぞと云はぬその内に。ぱつとかをりし名香は。顏世が馴れし義貞の兜にてござ候と フシ差出せば。地左様ならめと一決し鹽冶桃井兩人は。寶藏へ納むべしこなたへ來れと御座を立ち。顏世にお暇賜りて段かづらを過ぎ給へば。鹽冶桃井兩人も オクリ 打連れてこそ入りにける。地後に顏世はつきほなく。師直様は今暫し。御苦勞ながらお役目を。お仕舞あつてお靜に。詞お暇の出たこの顏世。長居は恐れおさらばと。地立上る袖摺寄つてじつかと控へ。詞コレマアお待ち待ち給へ。今日の御用仕舞ひ次第。その許へ推參してお目にかける物がある。幸ひのよい所召出された直義公は我が爲には結の神。御存の如く我等歌道に心を寄せ。吉田の兼好を師範と頼み日々の狀通。その許へ屆けくれよと問合せのこの書狀。いかにもとのお返事は。口上でも苦しうないと。地袂から袂へ入るゝ結び文。顏に似合はぬ樣參る武藏鐙と書いたるを。見るよりはつと思へども。はしたなう恥しめては却つて夫の名の出る事。持歸つて夫に見せうか。



竹本座興行の番附

いや〳〵それでは鹽冶殿。憎しと思ふ心から怪我過にもならうかと。ッシ物をもいはず投返す。人に見せじと手に取上げ。詞戻すさへ手に觸れたりと思ふにぞ我が文ながら捨ても置かれず。くどうは云はぬ。よい返事聞くまでは。口說いて〳〵口說きぬく。天下を立てうと伏せうとも儘な師直。鹽冶を生けうと殺さうとも。顏世の心たつた一つ。何とさうではあるまいかと。地聞くに顏世が返答も。ッシ涙ぐみたるばかりなり。地折から來合す若狹助。例の非道と見てとる氣轉。詞顏世殿まだ退出なされぬか。お暇出でて隙取るは。地却つて上への恐れッシ早お歸りと追立つれば。地彼奴扨はけどりしと。弱身を食はぬ高師直。詞ヤア又してもいはれぬ出過。立つてよければ身が立たず。此度のお役目。首尾よう勤めさせくれよと。鹽冶が內證顏世が賴み。さうなうては叶はぬ筈。大名でさへあの通り。小身者に捨知行誰が蔭で取らする。師直が口一つで御器提けうも知れぬあぶない身代。それでも武士と思ふぢやまでと。地邪魔の返報にくて口くわつとせきたつ若狹助。刀の鯉口碎ける程 スエテ握り。つめはつめたれども。神前なり御前なりと一旦の堪忍も。今一言の生死の。詞の先手還御ぞと。御先を拂ふ聲々に詮方なくも期を延ばす。無念は胸に忘られず。惡事悖つて運强く切られぬ高師直を。明日の我が身の敵とも。知らぬ鹽冶が後押へ。直義公は悠々と步御なり給ふ御威勢。人の兜の龍頭御藏に入るゝ數々も。四十七宇のいろは分け假名の兜を和らげて。兜頭巾の綻びぬ國の。捉ぞ 三重へ久方のハルフシ空も彌生の黃昏時。地桃井若狹助安近の。舘の行儀はき掃除。お庭の松も幾千代を守る舘の執權職。加古川本藏行國。年も五十の分別盛り。ッシ上下ためつけ書院先。地步み來るとも白洲の下人。詞ナント闕內この間はお上にはでつかちないお拵。都からのお客人。昨日は鶴ケ岡の八幡へ御社參。夥しいお物入アゝその銀の入目が欲しい。その銀があつたらこの可介。名を改めて樂しむになア。何ぢや名を改めて樂しむとは珍しい。そりや又何と變へる。ハテ角助と改めて胴を取つてみる氣。ナニ馬鹿面なわりや知らないか。昨日鶴ケ岡で。此旦那若狹助樣いかう不首尾であつたけな。仔細は知らぬが師直殿が大きな恥をかゝせたと奴部屋の噂。定めて又無理をぬかして。お旦那をやりこめ地をつたであろと ッシさがなき口々。詞ヤイ〳〵何をざわ〳〵とやかましいお上の取沙汰。殊に御前の御病

第二

氣。お家の恥辱になる事あらばこの本蔵聞流しおくべきや。鞠は下部の嗜み。掃除の役目了うたら。皆行け 地行けと和らかに。女小性が持ち出づる。煙草輪を吹く雲を吹く。本ヲシ廊下昔なふ衣の香や。

地本蔵がほんそうの一人娘の小浪御寮。母の戸無瀬諸共にしとやかに立出づれば。詞是は〳〵両人とも御前のお伽は申さいで。自身の遊か不行儀萬千。イエ〳〵今日は御前様殊の外の御機嫌。今すや〳〵とお休みそれでナア母様。イヤ申し本蔵殿。先程御前の御物語。昨日小浪が鶴ヶ岡へ御代参の歸るさ。殿若狭助様。高師直殿詞爭ひ遊ばせしとのお噂。誰が云ふとなくお耳に入りそれはそれはきついお楽じ。夫本蔵仔細詳しく知りながら。自に隠すのかやとお尋ね遊ばす故。小浪に様子を尋ぬれば。是も私と同じ事。地何にも様子は存じませぬとのお返事。御病氣の障りお家の恥になる事なら。詞アヽこれ〳〵戸無瀬。それ程のお返事なぜ取繕うて申上げぬ。主人は生得御短慮なるお生附。なんの詞爭ひなどとは。女童の口癖。一言半句にても舌三寸の誤りより身を果すが刀の役目。武士の妻でないか。それ程の事に氣がつかぬか嗜めさ〳〵。ナニ娘。汝は又御代参の道すがら。左様の噂はなかりしか。但しあつたか。ナニないヲ、その筈〳〵。ハヽヽ何のべしてもない事を。よし〳〵奥方のお心休め。地直にお目にかゝらんとフシ立上る折こそあれ。地當番の役人罷り出で。詞大星由良之助様の御子息。大星力彌様御出なりと申し上ぐる。ムヽお客御馳走の申合せ。判官殿よりのお使ならんこなたへ通せ。コレ戸無瀬其方は御口上受け殿様へその通り申上げられよ。お使者は力彌。娘小浪と許嫁の婿殿御馳走申しやれ。地まづ奥方へ御對面とオクリ云ひ捨てヘ一間へ入りにける。地戸無瀬は娘を傍近くなう小浪。詞父様の堅苦しいは常なれども。今おつしやつた御口上。受取る役は其方にとありそな所を。戸無瀬にとは母が心ときつい違ひ。そもじも亦力彌殿の顔も見たかろ逢ひたかろ。母に代つて出迎やや。詞いやか〳〵と問返せば。あいともいやとも返答はフシ赤らむ顔のおほこさよ。地母は娘の心をくみアイタヤヽ。娘背を押してたも。是は何と遊ばせしとうろたへ騒げばイヤなう。詞今朝からの心遣ひ又持病の癪が差込んだ。是ではどうもお使者に逢はれぬ。アイタヽタ娘。大儀ながら御口上も受取り。御馳走を申してたも。お主と持病には勝たれぬ。地勝たれぬとそろ〳〵と立上り。詞娘や隨分御馳走申しやや。したが餘り馳走すぎ。大事の口上忘れまいぞ。わしも

婿殿にアイタ、。地あいたからうの奥様は。ッシ氣は通してで奥へ行く。地小浪はお後伏拜み〳〵。詞忝い母様。日頃戀しゆかしい力彌様。逢はゞどう云をかう云をと。地娘心のとき〳〵と。ッシ胸に小浪を打寄する。地疊觸りも故實を正し入來る大星力彌。まだ十七の角髮や。二つ巴の定紋にッシ大小。立派爽かに。地流石大星由良之助が子息と見えしその器量。しづ〳〵と座に直り。詞誰そお取次頼み奉ると地慇懃に相述ぶる。小浪ははつと手をつかへぢつと見かはす顏と顏。互の胸に戀人と。物の得云はぬ赤面は。梅と櫻の花相撲にッシ枕の行司なかりけり。地小浪やう〳〵胸押鎭め。詞是は〳〵御苦勞千萬にようこそお出で。只今の御口上受取る役は私。御口上の趣を。お前の口から私が口へ。地直におつしやつて下さりませと摺寄れば身をひかへ。詞ハア是は〳〵無作法千萬。惣じて口上受取り渡しは。行儀作法第一と。地疊を下り手をつかへ。詞主人鹽冶判官より若狹助様への御口上。明日は管領直義公へ來明より相詰むる筈の所。定めてお客人も早早にお出あらん。然れば判官若狹助兩人は。正七ツ時にきつと御前へ相詰めよと師直様より御仰せ。萬事間違のなきやうに今一應御使者に參れと。主人判官申付け候故右の仕合この通り若狹助様へ御申上げ下さるべしと。地水を流せる口上に。小浪はうつかり顏見惚れッシとかう。答もなかりけり。地ヲヽ聞いた〳〵使大儀と若狹助。一間より立出で。詞昨日お別れ申してより。判官殿間違うてお目にかゝらず。成程正七ツ時に貴意得奉らん。委細承知仕る。判官殿にも御苦勞千萬と。宜しく申傳へてくれられよ。お使者大儀。然らばお暇申上げん。ナニお取次の女中御苦勞と。地しづ〳〵立つて見向きもせず衣紋繕ひ立歸る。地本藏一間より立代り。詞ハア殿は是に御入り。いよいよ明朝は。正七ツ時に御登城御苦勞千萬。今宵も最早九ツ。暫く御睡眠遊ばされよ。成程〳〵。イヤナニ本藏。其方にちと用事あり密々の事。小浪を奥へ〳〵。ハアコリヤ〳〵娘。用事あらば手を打たう奥へ地奥へと娘を追ひやり。合點のゆかぬ主人の顏色とお側へ立寄り。詞先程よりお伺ひ申さんと存ぜし處。委細つぶさに御仰せ。地下さるべしと差寄ればにじり寄り。地本藏今此若狹助が云出す一言。何によらず畏り奉ると二言と返さぬ誓言聞かう。ハア是は〳〵改つた御詞畏り入り奉るではござれども。武士の誓言は。ならぬと云ふのか。イヤ左にあらず。先づ委細とつくと承り。仔細を云はせ後で意見か。イヤそれは。詞を背くか。

サア何と。ハツ 地はつとばかりにさしうつむきッシ暫く。詞なかりしが。地胸を極めて差添抜き。片手に刀拔出し。てう〳〵〳〵と金打し。地本藏が心底かくの通り。留めも致さず他言もせぬ。先づ思召の一通りおせきなされずと。本藏めが胃の腑に。落付くやうにとつくりと承らんと相述ぶる。ム、一通り語つて聞かせん此度管領足利左兵衛督直義公。鶴ヶ岡造營故。此鎌倉へ御下向。御馳走の役は鹽冶判官。某兩人承る所に。尊氏將軍よりの仰せにて。高師直を御添人。萬事彼が下知に任せ御馳走申上げよ。年配といひ諸事物馴れたる侍と。御意に隨ひ勝に乘つて日頃の我儘十倍增し。都の諸武士並居る中。若年の某を見込み雜言過言眞二つにと思へども。お上の仰せを憚り。堪忍の胸を押へしは幾度。明日は最早了簡ならず。御前に於て恥面かゝせる武士の意地。その上にて討つて棄つる必ず留めるな。日頃某を短慮なりと奥を始め其方が意見。幾度か胸にとつくと合點なれせずとも。師直一人討つて棄つれば天下の爲。家の恥辱には代へられぬ。必ず〳〵短慮故に身を果す若狹助。猪武者よ

ども。無念重る武士の性根。家の斷絶奥が歎き。思はんにてはなけれども。刀の役目弓矢神への恐れ。地戰場にて討死は狼狽者と。世の人口を思ふ故。汝にとつくと打明すと。思込んだる無念の涙。スエテ五臟を貫く思ひなる。地横手を打つ

てしたり〳〵。詞ムヽよう譯をおつしやつた。よう御了簡なされた。この本藏なら今迄了簡はならぬ所。ヤイ本藏ナヽ何と云つた。今迄はよう了簡した堪忍したとは。わりやこの若狭助をさみするか。走はお詞とも覺えず。冬は日陰夏は日面。よけて通れば門中にて。行違の喧嘩口論ないと申すは町人の譬。武士の家では杓子定規。よけて通せばはうづがないと申すのが本藏めが誤りか。お詞さみ致さぬ心底。地御覽に入れんと御傍の。小刀抜くより早く書院なる。召替草履かたし片手の早ねた刄。とつくと合せ縁先の松の片枝ずつぱと切つて手ばしかく。フシ鞘に納め。詞サア殿。まつこの通りにさつぱりと遊ばせ〳〵。云ふにや及ぶ。地人や聞くとあたりに氣をつけ。今夜は未だ九ツくつたりと一休み。枕時計の目覺し本藏めがしかけ置く早く〳〵。詞ヲヽ聞人れあつて滿足せり。奥にも逢つて餘所ながらの暇乞。モウ逢はぬぞよ本藏地さらばさらばと云捨てて。奥の一間に入給ふフシ武士の。意氣地は是非もなし。地御後影見送り見送り勝手口へ走り出で。詞本藏が家來ども馬牽け早くと云ふ間もなく。地股立しやんと凛々しげにフシ御庭に引出せば。地縁よりひらりと打乘つて師直が館迄。續けや續けと乘り出す。詞轡にすがつて戸無瀬小浪コレ〳〵何處へ。始終の様子は聞きました年にこそよれ本藏殿。主人に御意見も申さず。合點ゆか

ぬ留めますと。地母と娘がぶら〳〵〳〵。
轡にすがり留むれば。詞ヤアこ差出た。
主人のお命お家のため思ふ故にこの時
宜。必ずこの事殿へ御沙汰致すな。お耳
へ入つたら娘は勘當。戸無瀬は夫婦の縁
を切る。地家來共道にて諸事を云付けん。
そこ退け兩人イヤ〳〵〳〵。シヤ面倒な
と鐙の端。一當はつしと當てられて。う
んとばかりにのつけに反るを見向きもせ
ず。家來續けと馬煙追立て打立て力足。
躋みたててこそ　三重へかけり行く

第三

地足利左兵衛督直義公。關八州の管領と
新に建てし御殿の結構。大名小名美麗を
飾る晴裝束。鎌倉山の星月夜と袖を列ぬ
る御馳走に。お能役者は裏門口。表御門
はお客人御饗應の役人衆。正七ツ時の御
ま成つゝ武家の威光ぞ輝きける。地西の御

門の見附の方。ハイ〳〵〳〵といかめし
く。提燈照らし入來るは。武藏守師直。
權威をあらはす鼻高々。花色模樣の大紋
に。胸に我慢の立烏帽子。家來共を役所
役所に殘し置き。下部僅に先を拂はせ主
の威光の召おろし。鶴の眞似する鷲坂伴
内。肩臂いからし申しお旦那。詞今日の
御前表も上首尾々々々。鑄冶で候の。イ
ヤ桃井で候のと。日頃はとつぱさつぱと
どしめけど。行儀作法は狗を。屋根へ上
げたやうでさりとは〳〵腹の皮。イヤそ
れにつきかね〳〵鑄冶が妻類世御前。未

だ殿へ御返事致さぬ由。お氣にはさへられな。器量はよけれど氣が叶はぬ。何の鹽冶づれと。當時出頭の師直樣と。ヤイ〳〵聲高に口きくな。主ある顏世。度々歌の師範に事寄せ。口說けども今に叶はぬ。即ち彼が召使かるといふ腰元新參と聞き。彼奴をこまづけ賴んで見ん。さてまだとりえがある。顏世が誠に否ならば。夫鹽冶に仔細をぐわらりと打明ける。所を云はぬは樂と。地四足門の片陰に主從點頭話し合ふッシ折もあれ。地見付に控へし侍あわたゞしく走出で。詞我々見付のお腰掛に控へし所へ。桃井若狹助家來加古川本藏。師直樣へ直にお目にかゝらんため。早馬にてお屋敷へ參つたれども早御登城。是非御意得奉らんと家來も大勢召連れたる體。地如何計らひ申さんやと聞くより伴內騷ぎ出し。詞今日御用のある師直樣へ。直に對面とは推參なり。地某直談と走行くを。詞待て〳〵伴內仔細は知れた。一昨日鶴ヶ岡にての意趣晴し。我が手を出さず本藏めに云付け。この師直が威光の鼻をひしがんため。ハ、、、伴內ぬかるな地七ツにはまだ間もあらん。是へ呼出せ仕舞うてくれん。成程成程家來ども氣を配れと。主從刀の目釘を濕し。手ぐすね引いてッシ待ちかけ居る。地詞に從ひ加古川本藏。衣紋繕ひ悠々と打通り。下部に持たせし進物ども。師直が目通りに並べさせッシ遙か下つて畏り。詞ハア憚りながら師直樣へ申上げ奉る。この度主人若狹助。尊氏將軍より御大役仰付けられ下さる段武士の面目身に餘る幸福。若輩の若狹助。何の作法も覺束なく。如何あらんと存ずる所に。師直樣萬事御師範遊ばされ。諸事をお引廻し下され候故。首尾よく御用相勤むるも全く主人が手柄にあらず。皆師直樣のお執成と。主人を始め奧方一家中。我々迄も大慶この上や候べき。さるによつて近頃些少の至りに候へども。右御禮のため一家中よりの贈り物。お受け遊ばされ下さらば。生前の面目一入願ひ奉る。地則ち目錄お取次と伴內に差出せば不思議さうにそつと取り押開き。詞目錄一ツ卷物卅本黃金卅枚若狹助奧方。一ツ黃金廿枚家老加古川本藏。同十枚番頭同十枚侍中。地右の通りと讀上ぐれば。師直はあいた口塞がれもせずうつとりと。主從顏を見合せて。氣拔けのやうにきよろりつと。祭の延びた六月の晦日見るが如くにて。ッシ手持無沙汰に見えにける。地俄に詞改めて。詞是は〳〵〳〵痛み入つたる仕合。伴內こりやどうしたもの。ハテさて〳〵。ハアお辭儀申さばお志背くといひ。第一は大きな無禮。エ、式作法を敎ゆるも。こんな折にはとんと困るナニ物ぢやわ。イ

ヤハヤ本藏殿。何の師範致す程の事もないが。とかくマア若狭助殿は器用者。師範の拙者及ばぬ〳〵。コリヤ伴内進物ども皆取納め。エヽ不行儀な。途中でお茶さへ得進ぜぬと。地手の裏返す挨拶に本藏が胸算用してやつたりと猶も手をつき。詞最早七ツの刻限はやお暇。殊に今日はなほ晴のお座敷。いよ〳〵主人の儀お引廻し頼み存すると。地立たんとする袂を控へ。詞ハテえいわいの。貴殿も今日のお座敷の座次。拜見なされぬか。イヤ陪臣の某御前の恐れ。大事ない大事ない。この師直が同道するに。誰がくつとも云ふ者ない。殊に又若狭助殿も。何ぞれかぞれ小用のあるもの。平に〳〵と勸められ。地然らばお供仕らん。詞御意を背くは却つて無禮。地先づお先へと行くにつき。金で面撲る算用に。主人の命も買うて取る。二一天作算盤の。桁を違へね白鼠。忠義忠臣忠孝の。道は一筋眞直にッシ打連れ御門に入りにける。ハルッシ程もあらさず入來るは。鹽冶判官高定。是も家來を殘し置き。乘物道に立てさせ。譜代の侍早野勘平。朽葉小紋の新袴。ざは〳〵ざはつく御門前。詞鹽冶判官高定登城なりと音なひける。門番罷り出で。先程桃井様御城登遊ばされ御尋ね。唯今又師直様御越にて御尋ね。早御入と相述ぶる。ナニ勘平最早皆々御入とや。地遲なはりし殘念と。勘平一人お供にてッシ御前へこそは急ぎ行く。地奥の御殿は御馳走の。地謠の磬播磨潟　謠高砂の浦に着きにけり〳〵。ナホス地謠ふ磬々門外へ。ハルッシ風が持て來る柳かけ。その柳より風俗は。まけぬ所髓の。小オクリ十八九松の。緑の細眉も堅い屋敷に物馴れし。奇特帽子の後帶。供の奴が提燈はッシ鹽冶が家の紋所。地御門前に立休らひ。詞コレ奴殿。やがてもう夜も明ける。こなた衆は門内へは叶はぬ。こゝから往んで休んでやと。地詞に從ひナイ〳〵と。ッシ供の下部は歸りける。地内を覗いて勘平殿は何してぞ。どうぞ逢ひたい用があると。見廻す折から後影。ちらと見附け。詞おかるぢやないか。勘平さん逢ひたかつたにようこそ〳〵。ムヽ合點のゆかぬ夜中といひ。供をも連れず只一人。さいなあ。こゝ迄送りし供の奴は先へ返した。わし一人殘りしは。奥様からのお使。どうぞ勘平に逢うてこの文箱。判官様のお手に渡し。お慮外ながらこの返歌をお前のお手から直に師直様へ。お渡しなされ下さりませと傳へよ。然しお取込の中間違ふまい物でなし。マア今宵はよしにせうとのお詞。地私はお前に逢ひたい望み。何のこの歌の一首や二首。お屆けなさるゝ程の間のない事はあるまいと。つい一走

りに走つて來た。ッシアヽしんどやと吐息つく。詞然らばこの文箱旦那の手から師直樣へ渡せばよいぢやまで地どりや渡して來う待つて居いと云ふ中に門内より。詞勘平々々々判官樣が召しまする。勘平々々。ハイ〳〵只今それへ。地エヽ忙しないとッシ袖振切つて行く後へ。地鰐踏む足つき鷲坂伴内。詞何とおかる戀の智惠は又格別。勘平めとせゝくつてゐる所を。勘平々々旦那がお召しと呼んだはきついか〳〵。師直樣がそもじに頼みたい事があるとおつしやる。我等はそさまにたつた一度。地君よ君よと抱附くを突飛ばし。詞コレみだらな事を遊ばすな式作法のお家に居ながら狼藉千萬。あた無作法なあた不行儀と。地突退くればそれは情ない。くらがり紛れについいちよこ〳〵と。手を取り爭ふその中に。詞伴内樣伴内樣師直樣の急御用。伴内樣伴内樣と。地奴二人がうろ〳〵眼玉で是はしたり伴内樣。詞最前から師直樣がお尋ね。式作法のお家に居ながら。女を捕へあた不行儀な。あた無作法と。地下部が口々。エヽ同じやうに何ぬかすと。ッシ面ふくらして連立ち行く。地勘平後へ入代り。詞何と今の働き見たか。伴内めが一杯食うて往せをつた。俺が來て旦那が呼ばしやると云ふと。おけ古いとぬかすが面倒さに。奴共に酒飲ませ。古いと云はさぬこの術ハヽヽヽまんまと首尾はしおふせた。サアその首尾序にな。地ちよつと〳〵と手を取れば。詞ハテさてはすんだマア待ちやいの。何云はんすやら。何の待つ事があるぞいな。もうやがて夜が明けるわいな。地是非に〳〵に是非なくも下地は好きなり御意はよし。詞それでもこゝは人の出入。地奥は謠の聲高砂。詞松根に倚つて腰を摩ればナホス詞アノ謠で思付いた。地イザ腰掛でと手を引合ひ打連れて行く。地脇能過ぎて御樂屋に鼓の調べ太鼓の音。天下泰平繁昌の壽祝ふ直義公。御機嫌ッシなゝめならざりける。地若狭助はかねて待つ師直遲しと御殿の内。奥を覗ふ長袴の紐締めくゝり氣配し。おのれ師直眞二つと刀の鯉口息をつめ。ッシ待つとも知らぬ地師直主從遠目に見付け。詞是は〳〵若狭助殿。さて〳〵お早い御登城。イヤハヤ我折りました。我等閉口閉口。イヤ閉口序に貴殿に言譯致し。お詫申す事があると。地兩腰くわらりと投出し。詞若狭助殿。改めて申さねばならぬ一通。いつぞや鶴ケ岡で。拙者より申した過言。ヲヽお腹が立つたであらう尤ぢや。がそこをお詫び。その時はどうやらした詞の間違でつい申した。我ら一生の粗忽。武士がコレ手をさける眞平々々。假令貴殿が物馴れたお人なりやこそ。外

外の狼狽者で見さつしやれ。この師直眞二つこはや〳〵。ありやうはその節貴殿の後影に手を合して拜みましたアハ、、、ア、年寄るとやくたい〳〵。年に免じて御免々々。是さ〳〵武士が刀を投出し手を合す。是程に申すのを聞入れぬ貴公でもないわさ。とかく幾重にも誤り〳〵。伴内共々に。地お詫〳〵と。金が云はする追從とは夢にも知らぬ若狭助。力みし腕も拍子拔け。今更拔くに拔かれもせず。窠双合せし刀の手前差俯向きし思案顏。小柴の蔭には本藏が。瞬もせず。ツシ守り居る。詞ナニ伴内この鹽冶はなぜ遲い。若狭助殿とはきつい違ひ扨々不行儀者。今に於いて面出しせぬ。主が主なれば家老で候とて。諸事に細心のつく奴が一人もない。いざ〳〵若狭殿御前へお供致そ。サアお立ちなされ。サアササア師直めあやまつてをろぞ。コリヤ爰な粋め粋め。粋様め。イヤ若狭助最前から。ちと心惡うござる。マア先へ。何とした〳〵腹痛か。コレサ伴内お背中をお背中を。お藥進じよかな。イヤ〳〵それ程にもござらぬ。然らば少しの内お寛ぎ。御前の首尾は我等がよいやうに申し上ぐる。伴内一間へ御供申せと地主從寄つてお手車に迷惑ながら若狭助。是はと思へど是非なくも奥の一間へ入りければ。アヽもう樂ぢやと。本藏は。天を拜し地を拜し。ツシお次の間に控へ居る。地程もあらさず鹽冶判官。御前へ通る長廊下師直呼掛け遲し遲し。詞何と心得てござる。今日は正七ツ時と。先刻から申渡したではないか。成程遲なはりしは不調法さりながら。御前へ出るはまだ間もあらんと。地扶より文箱取出し。詞最前手前の家來が。貴公へお渡し申しくれよ。則ち奥顏世方よりと。地渡せば受取り成程々々。詞イヤ其許の御内方は扨々心懸がござるわ。手前が和歌の道に心を寄するを聞き。添削を賴むとある。地定めてその事ならんと押披き。詞さなきだに。重きが上のさよ衣。我がつまならぬつまな重ねそ。ハア是は新古今の歌。この古歌に添削とはムヽ。地ムヽと思案の中。我が戀のかなはぬ驗。扨は夫に打明けしと思ふ怒をさあらぬ顏。詞判官殿。この歌御覽じたでござらう。イヤ只今見ました。ムヽ手前が讀むのを。アヽ貴殿の奥方はきつい貞女でござる。ちよつと遣はさるゝ歌が是ぢや。つまならぬつまな重ねそ。アヽ貞女々々。ア其許はあやかり者。登城も遲なはる筈の事。家にばかりへばり着いてござるによつて。御前の方はお構ひないぢやと。地あてこする雜言過言。あちらの喧嘩の間違とは。判官更に合點ゆかず。むつとせしが押鎭め。詞ハヽヽヽ

是は〳〵師直殿には御酒機嫌か。御酒参つたの。イヤ何時飲ました。御酒下されても飲まないでも。勤むる所はきつと勤むる。貴公はなぜ遅かつたの。御酒参つたか。イヤ家にへばりついてござつたか。貴殿より若狭助殿アヽ格別勤められます。イヤ又其許の奥方は貞女といひ。御器量と申し。手跡は見事。御自慢なされ。むつとなされな嘘ではないわさ。今日御前にはお取込。手前とても同然。その中へ鼻毛らしい。イヤ是は手前が奥が歌でござる。それ程家が大切なら御出仕無用。總體貴様のやうな。家にばかり居る者を。井の鮒ぢやといふ譬がある。聞いておかつしやれ。かの鮒めが僅か三尺か四尺に井の中を。天にも地にもないやうに思うて。不斷外を見る事がない。所にかの井がへの釣瓶について上ります。それを川へ放してやると。何が内にばかり居る奴ぢやによつて。喜んで途を失ひ。栃杭で鼻を打つて。即座にびり〳〵〳〵〳〵と死にます。貴様も丁度鮒と同じ事ハヽヽヽ地ッシと出放題。地判官腹に据ゑかね。詞こりやこなた狂氣めさつたか。イヤ氣が狂うたか師直。シヤ此奴。武士を捉へて氣違とは。出頭第一の高師直。ムヽすりや今の悪言は本性よな。くどい〳〵。又本性ならどうする。地ヲヽかうすると抜討に。眞向に切付ける眉間の大傷。是はと沈む身の翻し。烏帽子の頭二つに切れ。又切りかけるを抜けつ潜りつ逃げ廻る折ものれ。お次に控へし本藏走出て押留め。詞コレ判官様御短慮と。地抱きとむる其際に師直は。舘をさしてこけつ轉びつ逃げ行けば。おのれ師直眞二つ。放せ本藏放しやれとせり合ふ中。舘も俄に騒出し。家中の諸武士大名小名。押へて刀もぎ取るやら。師直を介抱やら上を下へと。三重へ立騒ぐ。地表御門裏御門。兩方打ちたる舘の騒動提灯ひらめく大騒ぎ。早野勘平うろ〳〵眼走り歸つて裏御門。碎けよ破れよと打叩き大音上げ。詞鹽冶判官の御内早野勘平主人の安否心許なしこゝ開けてたべ地早く〳〵とッシ呼ばはつたり。地門内よりも聲高々。詞御用あらば表へ廻れこゝは裏門。成程裏門合點。表御門は家中の大勢早馬にて寄付かれず。喧嘩の様子は何と何と。喧嘩の次第相濟んだ。出頭の師直様へ慮外致せし科によつて。鹽冶判官は閉門仰付けられ。網乘物にてたつた今地歸られしと聞くよりハア南無三寶。お屋敷へと走りかゝつてイヤ〳〵〳〵。閉門ならば舘へは猶歸られじと行きつ。戻りつ思案最中。腰元おかる道にてはぐれヤア勘平殿。詞様子は殘らず聞きました。地こりや何としようどうせうと。スエテ取付き。歎くを取つ

て突退け。詞エ、めろ〳〵とほえ面。コリヤ勘平が武士は廢つたわやい。地もう是迄と刀の柄コレ待つて下され。詞こりやうろたへてか勘平殿。ヲ、うろたへた。これがうろたへずに居られようか。主人一所懸命の場にも在り合さず洞へ。四人同然の網乘物お屋敷は閉門。その家來は色に耽りお供に外れしと人中へ。兩腰差して出られうか髮を放せマ、、、待つて下さんせ。尤ぢや道理ぢやが。その狼狽武士には誰がした。皆私が心から死ぬる道、ならお前より私が先へ死なねばならぬ。今お前が死んだらば誰が侍ぢやと褒めまする。髮をとつくりと開分けて私が親里へ一先づ來て下さんせ。父樣も母樣も在所でこそあれ賴もしい人。もうかうなつた因果ぢやと思うて女房の云ふ事も。聞いて下され勘平殿と スエテ わつとばかりに。泣き沈む。地さうぢや尤もそらは新參なれば委細の事はえ知るまい。お家の執權大星由良之助殿。まだ本國より歸られず。歸國を待つてお詫せん。サア地一時なりとも急がんと身拵へする所へ。地驚坂伴內家來引連れ駈出て。詞ノリヤア勘平うぬが主人判官師直樣へ慮外を働き。かすり傷負はせし科によつて屋敷は閉門。追付首が飛ぶは知れた事。サア腕廻せ。地連歸つてなぶり切り覺悟ひろけとひしめけば。詞ノリヤアよい所へ驚坂伴內。汝一羽で食足らねど。勘平が腕の細葱。料理鹽梅食うて見よ。地イヤ物な云はせそ家來ども畏つたと兩方より。捕つたとかかるをまつかせとかいくゞり。兩手に兩腕捻上げはつし。ッシはつしと蹴返せば。地代つて切込む切先を刀の鞘にて丁ど受け。廻つて來るを鎺と柄にて仰向にそらし。四人一所に切りかゝるを右と左へ一時に。田樂返しにばた〳〵〳〵と打据ゑられ。皆散々に行く後へ。伴內いらつて切りかくる引放しそつ首握り。大地へどうどもんどり打たせしつかと踏付け。詞サアどうしようと此方の儘。突かうか切らうか地なぶり殺しと振上ぐる刀にすがつて。詞コレ〳〵其奴殺すとお詫の邪魔。地もうよいわいのと留める間に足の下をばこそ〳〵と。尻に尾のない驚坂は。命からゞ〳〵逃げて行く。地エ、殘念々々さりながら。彼奴をばらさば不忠の不忠。一先づ夫婦が身を隱し時節を。待つて願うて見ん。最早明六ツ東が白む橫雲に塒を離れ飛ぶ鴉かはい〳〵の女夫連道は。急げど後へ引く。主人の安否如何ぞと案じ。行くこそ。三承へ浮世なれ

第四

地鹽冶判官閉居によつて扇ヶ谷の上屋敷。大竹にて門戸を閉ぢ。家中の外は出

入を留め。ヲシ事嚴重に見えにける。ハルヲシかゝる折にも。花やかに（小オクリ）奥は。媚く女中の遊び。御臺所顏世御前。お側には大星力彌。殿のお氣を慰めんと。鎌倉山の八重九重色々櫻。花籠に。活けらるる花よりも。ヲシ生ける人こそ花紅葉。地柳の間の廊下を傳ひ諸士頭原鄕右衞門。後に續いて斧九太夫。詞是は〳〵力彌殿早い御出仕。イヤ某も國許より親どもが參る迄。晝夜相詰め罷在る。地それは御奇特千萬と鄕右衞門兩手をつき。詞今日殿の御機嫌は。如何お渡り遊ばさるゝと。地申上ぐれば顏世御前。詞ヲヽ二人とも大儀々々。この度は判官樣お氣詰りに思召し。お失例も出ようかと案じたとは格別。明暮築山の花盛り御覽じて。御機嫌のよいお顏ばせ。地それ故に自もお慰みに差上げうと。名ある櫻を取寄せて見やる通りの花拵へ。詞アヽ如何樣にも仰の通り。花は開くものなれば御門も開き。閉門をお赦さるゝ吉事の御趣向。拙者も何がなと存ずれど。かやうな事の思付は。不調法なる鄕右衞門。ヤア肝心の事申上げん。今日御上使のお出と承りしが。定めて殿の御閉門を御赦さるゝ御上使ならん。何と九太夫殿。さうは思召されぬか。ハヽヽヽコレ鄕右衞門殿。この花といふものも。當分人の目を喜ばすばかり。風が吹けば散り失せる。こなたの詞もまつその如く。人の心を喜ばさうとて。武士に似合ぬ。ぬらりくらりと後からはける正月詞。何故と云やれ。この度殿の御越度は。饗應の御役儀を蒙りながら。執事たる人に手を負ふせ舘を騷がせし科。輕うて流罪。重うて切腹。自體又師直公に。敵對は殿の御不覺と。地聞きもあへず鄕右衞門。詞扨は其方殿の流罪切腹を願はるゝか。イヤ願ひは致さねど詞を飾らず眞實を申すのぢや。もとはと云へば鄕右衞門殿。こなたの吝嗇しはさから起つた事。金銀をもつて面を撲りめさるれば。かやうな事は出來申さぬと。地己が心に引當てて。欲面打消す鄕右衞門。詞人に媚び詔ふは侍ではない武士でないなう力彌殿。地何とさうではあるまいかと。詞の角をなだむる御臺。二人ともに爭ひ無用。詞この度夫の御難儀なさる。元の起りはこの顏世。いつぞや鶴ヶ岡で饗應の折柄。道知らずの師直。主のある自に無體な戀をいひかけ。樣々と口說きしが。恥を與へ懲りさせんと。判官樣にも知らず。地歌の點に事よせ。さよ衣の歌を書き恥ぢしめてやつたれば。詞戀のかなはぬ意趣ばらしに判官樣に惡口。元來短氣なお生附。地え堪忍なされぬはお道理でないかいのと。語り給へば鄕右衞門力彌も共に御主君の。御憤を察し

入り。ッシ心外面にあらはせり。地早御上使の御出と玄關廣間ひしめけば。奥へかくと通じさせ。御臺所も座を下り三人出迎ふ間もなく。入來る上使は石堂右馬之丞。師直が昵近藥師寺次郎左衛門。役目ならば罷り通ると會釋もなく上座につけば。一間の内より鹽冶判官しづ〳〵と立出で。詞是は〳〵御上使とあつて石堂殿御苦勞千萬。まづお盃の用意せよ。地御上使の趣承り。いづれもと一獻酌み。積鬱をはらし申さん。詞ヲヽそれようござろ。藥師寺もお相致さう。したが上意を聞かれたら酒も咽へ通るまいと。地嘲笑へば右馬之丞。詞我々今日。上使に立つたる趣。具に承知せられよと。地懐中より御書取出し。押開けば判官もスエテ席を。改め承るその文言。この度鹽冶判官高定。私の宿意を以て執事高師直を刄傷に及び。館を騒がせし科によつて。國郡を沒收し。切腹申付くるものなり。地聞くよりはつと驚く御臺。並居る諸士も顔見合せッシあきれはてたるばかりなり。地判官勳ずる氣色もなく。御上意の趣委細承知仕る。詞扨是からは各の御苦勞休めに。打寛いで御酒一つ。コレ〳〵判官だまり召され。其方が今度の科は。縛り首にも及ぶべき處。お上の慈悲をもつて。切腹仰付けらるゝを有難く思ひ。早速用意もすべき筈殊に以て切腹には定つた法のあるもの。それに何ぞや。當世樣の長羽織。ぞべら〳〵としらるゝは。酒興か但し血迷うたか。詞上使に立つたる石堂殿。この藥師寺へ不作法と。きめつくればにつこと笑ひ。詞この判官酒興もせず血迷ひもせぬ。今日上使と聞くよりも。かくあらんと期したる故。豫ての覺悟見すべしと。地大小羽織を脱ぎすつれば。下には用意の白小袖無紋の上下死裝束。皆々是はと驚けば。藥師寺は言句も出でず。ッシ顔ふくらして閉口す。地右馬之丞さし寄つて。詞御心底察し入る。即ち拙者檢使の役。心靜に御覺悟。ア御親切忝し。刄傷に及びしより。かくあらんとは豫ての覺悟。恨むらくは館にて。加古川本藏に抱留められ。地師直を討洩らし無念骨髓に徹つて忘れがたし。詞湊川にて楠正成。最期の一念によつて生を引くと云ひし如く。生きかはり死にかはり。鬱憤をはらさんと。地怒の聲と諸共に。お次の襖打叩き。詞一家中の者ども。殿の御存生に御尊顔を拜したき願。御前へ推參致さんや。郷右衛門殿お取次と。地家中の聲々聞ゆれば。郷右衛門御前に向ひ。詞如何はからひ候はん。フヴ尤なる願なれども。由良之助が參る迄無用〳〵。地はつとばかりに一間に向ひ。詞聞かるゝ通りの御意なれば。一人も叶はぬ〳〵

地諸士は返す詞もなく一間もひつそと。ッシしづまりける。地力彌御意をうけたまはり。かねて用意の腹切刀御前に直すれば。心靜に肩衣取りのけ座をくつろげ。詞コレ〳〵御檢使。御見屆け下さるべしと。地三方引寄せ九寸五分押戴き。詞力彌力彌。ハア。由良之助は。未だ參上仕りませぬ。フウ。エ、存生に對面せで殘念。ハテ殘り多やな。是非に及ばぬ是迄と。地刀逆手に取直し。弓手に突立て引廻す。御臺二目と見もやらずロに稱名口に涙。廊下の襖踏開き駈込む大星由良之助。主君の有樣見るよりも。はつとばかりにどうと伏す。後に續いて千崎矢間。その外の一家中ッシばら〳〵と駈入つたり。詞ヤレ由良之助待兼ねたわやい。ハア御存生の御尊顏を拜し。身に取つて何程か。ヲ、我も滿足々々。定めて仔細聞いたであろ。エ、無念口惜しいわやい。

委細承知仕る。この期に及び。申上ぐる詞もなし。只御最期の尋常を。願はしう存じまする。地ヲ、云ふにや及ぶと諸手切先にて氣管はね切り。血刀投出しうつぶせに。どうと轉び息絶ゆれば。御臺を始め並居る家中。眼を閉ぢ息をつめ齒をかけ。ぐつ〳〵と引廻し。苦しき息をほつとつき。詞由良之助。この九寸五分は汝へ形見。我が鬱憤を晴させよと。地食ひしばり控ゆれば。由良之助にじり寄り刀取上げ押戴き。血に染まる切先を打守り打守り拳を握り。無念の涙はらはら

はら。判官の末期の一句五臓六腑にしみ渡り。扨こそ末世に大星が。忠臣義心の名を上げし ッシ根ざしは。かくと知られけり。地藥師寺はつつ立上り。詞判官がくたばるからは早々屋敷を明渡せ。イヤさは云はれな藥師寺。いはゞ一國一城の主。ヤ方々。葬送の儀式取賄ひ。心靜に立退かれよ。この石堂は檢使の役目。切腹を見屆けたれば。この旨を言上せん。ナニ由良之助殿。御愁傷察し入る。地用事あらば承らん必ず心おかれなと。並居る諸士に目禮し。ッシ悠々として立歸る。詞この藥師寺も死骸片附けるその間。奥の間で休息せう。地家來參れと呼出し。詞家中共がらくた道具門前へ投り出せ。判官が所持の道具。俄浪人にまけられなと。地舘の四方をねめ廻し。ッシ一間の内へ入りにけり。地御臺はわつと聲を上げ。扨も〳〵武士の身の上程悲しいもののあるべきか。今夫の御最期に云ひたい事は山山なれど。未練なと御上使のさげしみが恥かしさに。今まで怺へてるたわいの。いとほしの有樣やと。亡骸に抱付き ッシ前後も。分かず泣給ふ。詞力彌參れ。亡君の御骸を。御菩提所光明寺へ早々送り奉れ。由良之助も後より追付き。葬送の儀式取行はん。堀矢間小寺間。その外の一家中道の警護致されよと。地詞の下よりお乘物手舁に舁き据ゑ戸を開き。皆立寄つて御死骸ッシ涙と共に。乘せ奉りしづ〳〵と舁き上ぐれば。御臺所は正體なく歎き給ふを慰めて。諸士の面々我一と。お乘物に引添ひ引添ひオクリ御菩提所へと急ぎ行く。地人々御骸見送つて。座につけば斧九太夫。詞何と大星殿。其許は御親父八幡六郎殿よりの家老職。拙者とてもその右には坐せども今日より浪人となり。妻子をはごくむ術なし。殿の貯へ置き給ふ御用金を配分し。早屋敷を渡さずば。藥師寺殿へ無禮ならん。イヤ千崎が存ずるには。さす敵の高師直。存命なるが我々が鬱憤。討手を引受け舘を枕として。アヽこれこれ。討死とは悪い了簡。親九太夫の申さるゝ通り屋敷を渡して金銀を分けて取るが上分別と。地評議の中に由良之助。默然として居たりしが。詞只今の評定に。彌五郎殿の所存と。我が胸中一致せり。いはゞ亡君の御爲に。我我殉死すべき筈むざ〳〵と腹切らうより。足利の討手を待受け。討死と一決せり。ヤア何と云はるゝ。よい評定かと思へば。浪人の痩顔はり。足利殿へ弓引かう。アヽそれは無分別。マアこの九太夫合點がゆかぬ。ヲヽ親父殿さうぢやさうぢや。この定九郎もその意を得ぬ。地この談合には省いて貰はう。長居は無益お歸りなされ。詞それよかろ。地いづれもは

ゆるりと居めされと。ッシ親子打連れ立歸る。地ヤア欲面の斧親子。討死を聞きおぢして逃歸つたる臆病者。彼奴構はずと大星殿。討手を待つ御用意御用意。詞アア騒がれな彌五郎。足利殿へなに恨あつて弓引くべき。彼等親子の心底を探らんための計略。藥師寺に屋敷を渡し。思ひ〳〵に當所を立退き。地都山科にて再會し。胸中殘らず打明けて。評議をしめんと云ふ間もあらせず。次郎左衛門一間を立出で。詞ハテべん〳〵と長詮議。死骸片付けたら。早く屋敷を明渡せと。地いがみかゝれば鄕右衛門。地ア、成程お待兼。亡君所持のお道具。その外の武具馬具迄よく〳〵改め受取られよ。サア由良之助殿退散あれ。地ヲヽ心得たりとしづ〳〵と立上り。詞御先祖代々我々も代々。地衾夜詰めたる館の中。今日を限りと思ふにぞ。名殘り惜しけに見返り。見返り御門外へ立出づれば。地御骸送り奉り。力彌矢間堀小寺迫々に馳歸り。詞扨は屋敷をお渡しあつたか。この上は直義の。地討手を引受け討死せんと。はやり立てば由良之助。詞イヤ〳〵今死すべき所にあらず。是を見よ方々と。地亡君のお形見を拔放し。詞この切先には。我が君の御血をあやし。御無念の魂を殘されし九寸五分。この刀にて師直が。首かき切つて本意を遂げん。地げに尤と諸武士の勇。屋敷の内には藥師寺次郎。門の貫の木はつしと立てさせ。詞師直公の劉があたり。さてよいざま〳〵と。地家來一度に手をたゝき。どつと笑ふ。ッシ閧の聲。地あれ聞かれよと若侍取つて返すを由良之助。詞先君の御憤り晴さんと思ふ所存はないか。地はつと一度に立出でしが。思へば無念と館のコハリ内を。振返り振返り。はつたと睨んで。三重へ立出づる

第五

地鷹は死しても穗はつまずと譬に洩れず入る月や。日數も積る山崎の邊に近き侘住居。早野勘平若氣の誤り世渡る元手細道傳ひ。この山中の鹿猿を擊つて商ふ種ケ島も。用意に持つや袂まで鐵砲雨のしだらでん。誰が水無月と白雨の。霧間をッシこゝに松の蔭。地向ふより來る小提燈是も昔は弓張ヤクリの灯。洎さじ濡らさじと。合羽の裾に大雨を凌いで急ぐ夜の道。詞イヤ申し〳〵。卒爾ながら火を地一つ御無心と立寄れば。旅人もちやくと身構へし。詞ム、この街道は不用心と知つて合點の一人旅。見れば飛道具の一口。商。地えこそは借さじ出直せと。びくと動かば一討と。ッシ眼を配れば。詞イヤア成程。盜賊とのお目違ひ御尤も千萬。我等この邊の狩人なるが。先程の大雨にほくちも

しめり雛儀至極。サア錢砲をそれへお渡し申す。地自身に火をつけ御借しと。他事なき詞顏付を。きつと眺めて。詞和殿は早野勘平ならずや。さ云ふ貴殿は千崎彌五郎。是は堅固で御無事でと。地絶えて久しき對面に。主人のお家沒落の。胸に忘れぬ無念の思メエテ互に。拳を握り合ふ。地勘平はさしうつむき。暫し詞もなかりしが。詞エヽ面目もなき我が身の上。古朋輩の貴殿にも。地顏もえ上げぬこの仕合。武士の冥加に盡きたるか。詞殿判官公のお供先。お家の大事起りしは是非に及ばぬ我が不運。その場にも在合はさず。お屋敷へは歸られず所詮。時節を待つて御詫と。思の外の御切腹南無三寶。皆師直めがなす業。せめて冥途の御供と刀に手はかけたれど。地何を手柄に御供と。どの面さげて言譯せんと心を碎く折柄。詞密に樣子承れば。由良殿御親子鄕右衛門殿を始めとして。故殿の鬱憤散ぜんため。寄々の思召ありとの噂。我等とても御勘當の身と云ふではなし。手掛り求め由良殿に對面とけ。御企の連判に御加へ下さらば。地生々世々の面目。貴殿に逢ふも優曇華の。花を咲かせて侍の。一分立てて給はれかし。古朋輩の誼武士の情。詞お賴み申すと兩手をつき。先非を悔ひし男泣フシ理。せめて不便なる。地彌五郎も朋輩の悔み道理とは思へども。大事をむざと明かさじと。詞コレサコレサ勘平。はてさて。お手前は身の言譯にとりまぜて。お企のイヤ連判などとは何の讙言。左樣の噂かつてなし。某は由良殿より鄕右衛門殿へ急の使。先君の御廟所へ。御石碑を建立せんとの催し。然し我我とても浪人の身の上。是こそ鹽冶判官殿の御石塔と。末の世までも人の口の端にかゝるもの故。御用金を集むるそのお使。先君の御恩を思ふ人を選り出すため。わざと大事を明かされず。先君の御恩を思はゞナヽ合點か合點かと。地石碑になぞらへ大星の。企を餘所に知らせしは。フシけに朋輩の誼なり。詞ハアヽ忝い彌五郎殿。成程石碑と云立て。御用金の御拵へある事とつくに承り及び。某も何卒して用金を調へ。それを力に御詫と心は千千に碎けども彌五郎殿。恥づかしや主人の御罰で今この態。誰にかうと便もなし。されどもかるが親。與市兵衛と申すは賴もしい百姓。我々夫婦が判官公へ。不奉公を悔み歎き。何とぞして元の武士に立返れと。地翁嫗共に歎き悲しむ。是幸ひ御邊に逢ひし物語。段々の仔細を語り。元の武士に立返ると言ひ聞かさば。僅かの田地も我が子のため何しに否は得も云はじ。御用金を手掛りに鄕右衛門殿迄お取次。一入賴み存ずると餘儀なき詞にム

ム成程。詞然らば是より郷右衛門殿迄右の譯をも話し。由良殿へ願うて見ん。明明日必ずきつと御返事。則ち郷右衛門殿の旅宿の所書と。地渡せば取つて押戴き。重々のお世話忝し。地何卒急に御用金を拵へ。明々日お目にかゝらん。某が在所お尋ねあらば。この山崎の渡場を左へ取り。與市兵衛とお尋ねあれば。早速相知れ申すべし。夜更けぬ中に早くもお出で。コレこの行先はなほ物騒。隨分ぬかるな合點〳〵。石碑成就する迄は。蚤にも食はさぬこの身體。御邊も堅固で。御用金の便を待つぞ。地さらばさらばと兩方へ。オクリ立別れてぞ急ぎ行く。地又も降り來る雨の足人の足音とぼ〳〵と。道は闇路に迷はねど子故の闇につく杖も。すぐなる心堅親父一筋道の後から。詞オヽイオヽイ親父殿。地よい道連と呼ばはつて。斧九太夫が伴定九郎。身の置所白浪や。

此街道の夜働。だんびら物を落し差し。詞先刻にから呼ぶ聲が。貴樣の耳へはひらぬか。この物騒な街道を。よい年をして大膽々々。地連にならうと向うへ廻り。ぎよろつく眼玉ぎよつとせしが流石は老人。詞是は〳〵お若いに似ぬ御奇特な。私もよい年をして。一人旅はいやなれど。サア何處の浦でも金程大切な物はない。去年の年貢に詰り。この中から一家中の在所へ行たれば。是も鏑半鐵才覺ならず。すご〳〵一人戻る道と。地半分云はさずヤイやかましい。詞ありやうが

年貢の納まらぬ相談を聞きには來ぬ。コレ親父殿。俺が云ふ事とくと聞かしやれや。マアかうぢやわ。こなたの懐に金なら四五十兩のかさ。縞の財布にあるのを。とつくりと見付けて來たのぢや。借して下され。男が手を合す。定めて貴様も何ぞつまらぬ事か。子が難儀に及ぶによつてと云ふやうな。ある格な事ぢやあろけれど。俺が見込んだらハテしよ事がないと諦めて。貸して下され 地下されと懐へ手を差入れ引ずり出す縞の財布。詞アヽ申しそれは。それはとは。是程爰にあるものと。地引つたくる手に縋り付き。詞イヱ〳〵この財布は後の在所で草鞋買ふとて端錢を出しましたが。後に殘るは晝食の握飯。雀亂せんやうにと娘が呉れた和中散。反魂丹でござります。お赦しなされて下さりませと。地ひつたくり逃行く先へ立廻り。詞エヽ聞分けのない。むごい料理するが嫌さに。手ぬるう云へばつけ上る。サアその金爰へまき出せ。遅いとたつた一討と。地二尺八寸拜み討ちなう悲しやと云ふ間もなくから竹割りと切付ける。刀の廻りか手の廻りか。はづれる拔身を兩手にしつかとつかみ付き。詞どうてもこなた殺さつしやるの。オヽ知れた事。金のあるを見てする仕事。小言はかずと地くたばれと。肝先へ差付くれば。詞マヽヽマア待つて下さりませハア是非に及ばぬ。成程々々。是は金でござります。けれどもこの金は。私がたつ

た一人の娘がござる。その娘が命にも代へぬ。大事の男がござりまする。その男のために要る金。ちと譯ある事故浪人して居まする。娘が申しまするは。あのお人の浪人も元は私故。何卒して元の武士にして進ぜたい〳〵と。噂と私とへ毎宵頼み。ア身貧にはござりまする。どうもしがくのしようもなく。婆と種々談合して。娘にも呑込ませ。婿へは必ず沙汰なしと糅し合せ。ほんに〳〵親子三人が血の流れる金。それをお前に取られて娘はなんとなりませう。コレ拜みます助けて下されませ。お前もお侍の果さうなが。武士は相身互。この金がなければ。娘も婿も人樣に顏が出されぬ。たつた一人の娘に連添ふ婿ぢやもの。不便にござる可愛ござる。了簡してお助けなされて下さりませ。ェ、お前は若いによつてまだお子もござるまいが。やんがてお子を持つて御覽じませ。親父が云ひ居つたは尤ぢやと思召して。この場を助けさしやつて下さりませ。マア一里行けば私が在所。金を婿に渡してから殺されましよ。申し〳〵娘が喜ぶ顏見てから死にたうござります。コレ申しア、。あれ。あれ。あれと呼ばはれど後先遠くフシ山彦の谺に。哀催せり。詞オヽ悲しいこつちやわ。まつとこほえ。ヤイ老耄め。その金で俺が出世すりや。その惠で汝が伜も出世するわやい。人に慈悲すりや惡うは報はぬ。ア、可愛いやと。地ぐつと突く。うんと手足の七轉八倒。のたくり廻るを脚にて蹴返し。詞オヽいとしや。痛かろけれども俺に恨はないぞや。金がありやこそ殺せ。金がなけりやならんのいの。金が敵ぢやいとしほや。南無阿彌陀。南無妙法蓮華經。地どちらへなりと失せをろと。刀も拔かぬ芋刺し抉り。草葉も朱に置く露や。年も六十四苦八苦フシあへなく息は絶えにけり。地しすましたりと件の財布。くらがり耳の摑みよみ。詞ヒヤ五十兩。ェ、久振りの御對面。地忝しと首にひつかけ死骸をすぐに谷底へ。はね込み蹴込み泥まぶれ。はねは我が身にかゝるとも知らず立つたる後より。逸散に來る手負猪。是はならぬと身をよぎる。駈來る猪は一文字。フシ木の根岩角踏立て。蹴立て鼻いからして泥もナギス草木も一まくりに飛行けば。あはやと見送る定九郎が。脊骨へかけてどつさりと肋へ拔ける二つ玉。うんともぎやつとも云ふ間もなく。ふすぼり返りて死したるはフシ心地よくこそ見えにけれ。地猪擊留めしと勘平は。鐵砲提げ此處彼處探り廻りて扨こそと。引立つれば猪にはあらず。詞ヤア〳〵こりや人ぢや南無三寶。地し損じたりと思へど暗き眞の闇。誰人なるぞと問はれも

せず。まだ息あらんと抱起せば手にあたる金財布。掴んで見れば四五十兩。天の與へと押戴き押戴き。猪より先へ逸散に飛ぶが如くに。三郎へ急ぎける。

第六

三下り歌 みさき踊がしゆんだる程に。親父出て見やばゝんつ。ばゝん連れて親父出て見やばゝんつ。ナボス麥かつ フシ昔の在郷歌。地 所も名に負ふ山崎の小百姓。與市兵衛が埴生の住家。今は早野勘平が。浪々の身の隱れ里。女房おかるはスエチ寢亂れし。髮取上げんと櫛箱の。あかつきかけて戻らぬ夫。待つ間もとけし投島田。ゆふに云はれぬ身の上を誰にか。黃楊の水櫛に。髮の色艶梳き返し。品よくしやんと結ひ立てしは フシ在所に惜しき姿なり。詞オヽ、娘髮結ひやつたか。美しようできた。イヤもう在所はどこもかも麥秋時分で忙しい。今も藪際で若い衆が麥かつ歌に。親父出て見やばゝんつれてと唄ふを聞き。親父殿の遲いが氣にかゝり。在口迄行たれどようなう影も形も見えぬ。サイナこりやまあどうして遲い事ぢや。わし一走り見て來やんしよ。イヤなう若い女の一人歩くは入らぬ事。殊にそなたは少さい時から。在所を歩く事さへ嫌ひで。鹽冶樣へ御奉公にやつたれど。どうでも草深い所に緣があるやら戻りやつたが。勘平殿と二人居やればおとましい顏も出ぬ。オヽかゝ樣のそりや知れた事。好いた男と添ふのぢやもの。在所はおろか貧しい暮しでも苦にならぬ。やんがて盆になつてと樣出て見やかゝんつ。地 かゝん連れてといふ唄の通り。詞勘平殿とたつた二人。踊見に行きやんしよ。地 お前も若い時覺えがあると指合くらぬぐはら娘。 フシ氣もわさ〳〵と見えにける。詞なんぼそのやうに面白うをかしう云やつても。心の中はの。イエ〳〵すんでござんす。主の爲に祇園町へ。勤奉公に行くは樣て覺悟の前なれど。地 年寄つて父樣の世話やかしやんすが。そりや云やんな。詞小身者なれど兄も鹽冶樣の御家來なれば。外の世話するやうにもないと。地 親子話のフシ中道傳ひ。地 駕籠を早かせて急ぎ來るは祇園町の一文字屋。此處ぢや此處ぢやと門口から。與市兵衛殿内にかと云ひつゝはひれば。地 是はまあ〳〵遠い所を。ソレ娘煙草盆。地 お茶上げましやと親子して。樋でおいへを白人屋の亭主。扨昨夜はこゝの親仁殿もいかい大儀。別條なう戻られましたか。エヽ扨は親父殿と連立つて來はなされませぬか。是はしたり。お前へ行てから今においてヤア戻られぬか。ハテめんえうな。ハア若し稻荷前をぶらついてかの玉殿につまゝりやる。

せぬかいの。コレこの中此處へ見に來て極めた通り。お娘の年も全五年限。給銀は金百兩。さらりと手を打つた。此處の親父が云はるゝには。今夜中に渡さねばならぬ金あれば。今晩證文を認め。百兩の金子お借しなされて下されと。涙をこぼしての頼み故。證文の上で半金渡し。殘りは奉公人と引替の契約。何がその五十兩渡すと喜んで戴き。ほた〳〵云うて戻られたはもう四ツでもあらうかい。夜道をひとり金持つて行かぬものと留めても聞かず戻られたが。但しは道にイエ〳〵寄らしやる所はなう母様。無いとも無いとも。殊に一時も早うそなたやわしに金見せて。喜ばさうとていきせきと戻らしやる筈ぢやに合點がいかぬ。イヤこれ合點のいくいかぬはそちの穿鑿。こちはさがりの金渡して。奉公人連れて往のと。懐より金取出し跡金の五十兩。是で都合百兩。地サア渡す受取らしやれ。お前それでも親父殿の戻られぬ中はなうかる。わがみはやられぬ。ハテぐづ〳〵と埒の明かぬ。コレぐつともすつとも云はれぬ與市兵衛の印形。證文がもの云ふ。今日から金で買切つた身體一日違へばれこづつ違ふ。地どうでかうせざすむまいと手を取つて引立つる。マア〳〵待つてと取付く母親突退けはね退け。無體に駕籠へ押込み押込み舁き上ぐる門の口。鐵砲に簑笠打掛け戻りかゝつて見る勘平。つか〳〵と内に入り。詞駕籠の中なは女房どもこりやマア何處へ。ヲヽ勘平殿よい所へよう戻つて下さつたと。地母の喜

びその意を得ず。詞どうでも深い譯がある。母じや人女房ども。地様子聞かうとおいへの眞中どつかと坐れば文字の亭主。詞オウ扨はこなたが奉公人の御亭ぢやの。たとへ夫でも何でも。號の夫などと脇より違亂妨け申す者無之候と。親父の印形あるからはこちには構はぬ。早う奉公人を受取らう。オヽ婿殿合點がいくまい。かねてこなたに金の要る様子娘の話で聞いた故。地どうぞ調へて進ぜたいと。云うたばかりで一錢のあてもなし。詞そこで親父殿の云はしやるには。ひよつとこなたの氣に女房賣つて金調ようと。よもや思うてではあるまいけれど。もし兩親の手前を遠慮して居やしやるまいものでもない。いつそこの與市兵衛が婿殿に知らさず娘を賣らう。まさかの時は切取りするも侍の習。女房賣つても恥にはならぬ。お主の役に立てる金。調へておましたらまんざら腹も立つまいと。

昨日から祇園町へ折極めに行て今に戻らしやれぬ故。親子案じて居る中へ親方殿が見えて。昨夜親父殿に半金渡し。跡金の五十兩と引替に娘を連れて行なうと云うてなれど。親父殿に逢うての上と譯を云うても聞入れず。今連れていなしやる處どうせうぞ勘平殿。是は〳〵まづ以つて身殿の心遣ひ忝い。したがこちにもちつとよい事があれどもそれはおつて。親父殿も戻られぬに女房どもは渡されまい。とはなぜに。ハテいはゞ親なり判かり。尤も昨夜半金の五十兩渡されたでもあらうけれど。イヤこれ京大坂を股に

かけ。女護島程奉公人を抱へる一文字屋。渡さぬ金を渡したと云うてすむものかいの。まだその上にたしかな事があるてや。此處の親父がかの五十兩といふ金を。手拭にぐる〳〵と卷いて懐へ入れらるゝ。そりやあぶない是に入れて首へかけさつしやれと。俺が着てゐるこの單物の縞の切で拵へた金財布貸したれば。やんがて首にかけて戻られうヤア何と。こなたが着てゐるこの縞の金財布か。ヲヽてや。あのこの縞でや。何とたしかな證據であらうが。地聞くよりはつと勘平が肝先にひしとこたへ。傍あたりに目を配り袂の財布見合せば。寸分違はぬ糸入り縞南無三寶。扨は昨夜鐵砲で擊殺したは見であつたか。ハアはつと我が胸板を二つ玉で擊ちぬかるゝよりせつなき思ひ。とは知らずして女房。詞コレこちの人そは〳〵せずと。やるものかやらぬものか。分別して下さんせ。オヽ成程。ハテもうあのやうに確に云はるゝからは行きやらずばなるまいか。アノ父様に逢はいでもかえ。イヤ〳〵親父殿にも今朝一寸逢つたが戻りは知れまい。フウそりや父様に逢つてかえ。地それならさうと云ひもせで母様にもわしにも。案じさしてばつかりと云ふに文字も圖に乘つて。詞七度尋ねて人を疑へぢや。親父の在所知れたのでそつちもこつちも心がよい。まだこの上にも四の五のあらばいや共にでんど沙汰。マア〳〵さらりとすんでめでたい。お袋も御亭も六條參りしてちと寄らしやれ。サア〳〵駕籠に早く乘りや。アイ〳〵これ勘平殿もうあつちへ行くぞえ。年寄つた二人の親達。どうでこな様のみんな世話。取分けて父様はきつい持病。氣をつけて下さんせと。地親の死目を露知らず。頼む不便さいぢらしさ。いつそ打明けありの儘話さんにも他人ありとスエテ心を。痛め耐へ居る。詞ヲヽ婿殿。夫婦の別れ暇乞がしたかうけれど。そなたに未練な氣も出よかと思うての事であらう。イエ〳〵なんぼ別れても。主の爲に身を賣れば悲しうも何ともない。わしや勇んで行く母様。したが父様に逢はずに行くのが。ヲヽそれも戻らしやつたらつい逢ひに行かしやろぞいの。煩はぬやう養するて。息災な顏見せに來てたも。鼻紙扇もなけりや不自由。何にもよいか。どばついて怪我しやんなと。地駕籠に乘る迄心をつけさらばや。さらば。何の因果で人並な娘を持ち。この悲しい目を見る事ぢやと。齒を食ひしばり泣きければ娘は駕籠にしがみつき。泣くを知らさじ聞かさじと聲をも。立てずむせかへる。地情なくも駕籠舁上げッシ道を早めて急ぎ行く。地母は後を見送り見送り。アヽよしない事云う

て娘もさぞ悲しかろ。詞ヲヽこな人わいの。親の身でさへ思切りがよいに。女房の事ぐづ〳〵思うて。煩うて下さんな。この親父殿はまだ戻らしやれぬ事かいなう。こなた逢つたと云はしやつたの。アア成程。そりやマアどこで逢はしやつて。どこへ別れていかしやつた。されば別れたその所は。鳥羽か伏見か淀竹田と。地口から出次第めつぽふ彌八。種ケ島の六狸の角兵衛。所の狩人三人連。親父の死骸に戮打若せて戸板に乗せ。どや〳〵と内に入り。詞夜山しまうて戻りがけこゝの親父殿が殺されて居られた故。狩人仲間が連れて來たと。地聞くよりはつと驚く母。何者の所爲。コレ婿殿殺した奴は何者ぢや敵をとつて下されなう。詞コレ親父殿〳〵と。地呼べど叫へど ッシ其甲斐も泣くより。外の事ぞなき。地狩人共口々に。詞ヲヽお袋悲しかろ。代官所へ願うて詮議して貰はしやれ。地笑止々々と打連れてッシ皆々我が家へ立歸る ッシ母は涙の。際よりも勘平が傍へ差寄つて。詞コレ婿殿。よもや〳〵〳〵とは思へども合點がいかぬ。なんぼ以前が武士ぢやとて。舅の死目見やしやつたら。びつくりもしやる筈。こなた道で逢つた時。金受取りはさつしやれぬか。親父殿が何と云はれた。サア云はつしやれ。サア何と。どうも返事があるまいがの。ない證據はコレ。地こゝにと勘平が懐へ手を差入れて引出すは。先刻にちらりと見ておいたこの財布。詞コレ血のついてあるからは。こなたが親父を殺したの。イヤそれは。それはとは。エ、わごりよはなう。隱されぬ天道樣が明らかな。親父殿を殺して取つた。その金にや誰にやる金ぢや。ムウ聞えた身貧な舅娘を賣つたその金を。中で半分くすねておいて。皆やるまいかと思うて。コリヤ殺して取つたのぢやな。今といふ今迄も。律氣な人ぢやと思うて。欺されたが腹が立つわいやい。エヽこゝな人でなし。あんまり呆れて涙さへ出ぬわいやい。地なういとしや與市兵衛殿。畜生のやうな婿とは知らず。どうぞ元の侍にしてやりたいと。年寄つて夜も寢ずに京三界を駈歩き。珍財を擲つて世話さしやつたも。却つてこなたの身の仇となつたるか。詞飼ひかふ犬に手を食はるゝと。ようも〳〵このやうにむごたらしう殺された事ぢやまで。コリヤこな鬼よ蛇よ。父樣をかへせ。親父殿を生けて戻せやいと。地遠慮會釋もあら男の。髻をつかんで引寄せ〳〵叩き付け。ずた〳〵に切りさいなんたとて是で何の腹が癒よと。恨の數々くどきたてッエテかつぱと伏して。泣居たる。地身の誤りに勘平も。五體に熱湯の汗を流し。壘に喰

付き天罰と。ッシ思ひ知つたる折こそあれ。地深編笠の侍二人早野勘平在宿をしめさるか。原郷右衛門千崎彌五郎御意得たしとおとなへば。折悪けれども勘平は。腰ふさぎ脇挾んで出迎ひ。詞コレハ〳〵御両所共に。見苦しき垣生へ御出忝しと。頭を下ぐれば郷右衛門。詞見れば家内に取込みもあるさうな。イヤもう些細な内證事。お構ひなくともいざ先づあれへ。地然らば左様に致さんとずつと通り座に着けば。二人が前に両手をつき。詞この度殿の御大事に外るゝは。拙者が重々の誤り。申開かん詞もなし。何卒某が科御赦しを蒙り。亡君の御年忌。諸家中諸共相勤むるやうに御両所の御執成地偏に頼み奉るとッシ身をへり下り述べければ。地郷右衛門取り敢ず。詞先づ以つて其方貯へなき浪人の身として。多くの金子御石碑料として調達せられし故。由良之助殿甚だ感じ入られしが。石碑を營むは亡君の御菩提。殿に不忠不義をせし其方の金子を以つて。御石碑料に用ひられんは。御尊靈の御心にも叶ふまじとあつて。金子は封の儘相戻さると。地詞の中より彌五郎懐中より金取出し。勘平が前にさし置けば。はつとばかりに氣も轉倒母は涙と諸共に。詞コリヤ爰な悪人づら。今といふ今親の罰思知つたか。皆様も聞いて下され。親父殿が年寄つて後生の事は思はず婿殿の爲に娘を賣り。金調へて戻らしやるを待伏して。あのやうに殺して取つた金ぢやもの。天道様がなくば知らず。なんで御用に立つものぞ。地親殺しのいき盗人に。罰をあてて下されぬは。神や佛も聞えぬ。詞あの不孝者お前方の手にかけて。嬶り殺しにして下され。地わしや腹が立つわいのと。スエテ身を投げ。伏して泣居たる。地聞くに驚く兩人刀押取り。弓手馬手に詰めかけ〳〵。彌五郎聲を荒らげ。詞ヤイ勘平。非義非道の金取つて。身の科の詫せよとは云はぬぞよ。わがやうな人非人武士の道は耳に入るまい。親同然の舅を殺し金を盗んだ重罪人は。大身槍の田樂さし。拙者が手料理振舞はんと。地はつたと睨めば郷右衛門。詞渇しても盗泉の水を飲まずとは義者の訓誡。舅を殺し取つたる金。亡君の御用金に相成るべきか。生得汝が不忠不義の根性にて調へたる金と推察あつて。つき戻されたる由良之助の眼力天晴々々。さりながら。ハア情なきはこの事世上に流布あつて。鹽冶判官の家來早野勘平。非義非道を行ひしと言はば。汝ばかりが恥ならず。亡君の御恥辱と知らざるかうつけ者。左程の事の辨なき汝にてはなかりしが。いかなる天魔が賦入れしと。地するどき眼に涙を浮かめ事をわけ理を責むれ

ば。堪りかねて勘平。詞肌押脱ぎ脇差を。抜くより早く腹にぐつと突立て。詞ア、いづれもの手前面目もなき仕合。拙者が望み叶はぬ時は切腹と豫ての覺悟。我舅を殺せし事亡君の御恥辱とあれば一通り申開かん。兩人ともに聞いてたべ。夜前彌五郎殿の御目にかゝり。別れて歸る暗まぎれ山越す猪に出合ひ。二ツ玉にて撃ちとめ。駈寄つて探り見れば。猪にはあらで旅人。南無三寶過つたり。藥はなきかと懐中を探し見れば。財布に入つたるこの金。道ならぬ事なれども天より我に與ふる金と。直ぐに馳せ行き彌五郎殿にかの金を渡し。立歸つて様子を聞けば。撃ち止めたるは我が舅。金は女房を賣つた金。地かほど迄する事なす事。鵜の嘴ほど違ふといふも。武運に盡きたる勘平が。身の成行推量あれとスエテ血走る眼に無念の涙。地仔細を聞くより彌五郎ずんど立上り。死骸引上げ打返しムウ〳〵と疵口改め。詞郷右衛門殿これ見られよ。鐵砲疵に似たれども。是は刀で抉つた疵。ェ、勘平早まりしと。地云ふに手負も見てびつくり。ッシ母も驚くばかりなり。地郷右衛門心づき。詞イヤコレ千崎殿。アア是にて思ひ當つたり。御自分も見られし通り。是へ來る道端に鐵砲受けたる旅人の死骸。立寄り見れば斧定九郎。强慾な親九太夫さへ。見限つて勘當したる悪黨者。身のたゝずみなき故に。山賊すると聞きたるが疑ひもなく勘平が。舅を討つたは彼奴が業ェ、そんなりや。あの親父殿を殺したは。外の者でござりますかえ。ハアはつと。地母は手負に縋り。詞コレ手を合して拜みます。年寄の愚痴な心から恨言うたは皆誤り。地怺へて下され勘平殿。必ず死んで下さるなと。泣き詫ぶれば顔ふり上げ。詞只今母の疑ひも。我が悪名も晴れたれば。是を冥途の思出とし。後より追付き舅殿。死出三途を伴はんと。地突込む刀引廻せばア、暫く暫く。詞思はずも其方が舅の敵討つたるは。未だ武運に盡きざる所。地弓矢神の御恵にて。一功立てたる勘平。息のある中郷右衛門が密に見する物ありと。地懐中より一卷を取出し。さら〳〵と押開き。詞この度亡君の敵。高師直を討取らんと神文を取りかはし。一味徒黨の連判かくの如しと。地讀みも終らず苦痛の勘平。その姓名は誰々なるぞや。詞徒黨の人數は四十五人。汝が心底見屆けたれば。其方を差加へ一味の義士四十六人。是を冥途の土産にせよと。地懐中の矢立取出し姓名を書記し。詞勘平血判地心得たりと腹十文字にかき切り。臓腑を摑んでしつかと押し。詞サア血判仕つた。ア、忝や有難や。我が望み達したり。母人歎いて下

さるな。舅の最期も女房の奉公も。反古にはならぬこの金。一味徒黨の御用金と。地云ふに母も涙ながら。財布と共に二包二人が前に差出し。詞勘平殿の魂の入つたこの財布。地婿殿ぢやと思うて。敵討の御供にッシ連れてござつて下さりませ。詞ヲヽ、成程尤なりと郷右衛門金取納め。地思へば思へばこの金は縞の財布の紫摩黄金佛果を得よと云ひければ。詞アヽ佛果とは穩らはし死なぬ〳〵。魂魄この土に留つて。敵討のお供すると。地云ふ聲もはや四苦八苦。母は涙にかきくれながらナウ勘平殿。この事を娘に知らしせめて死目に逢はしてやりたい。詞イヤ〳〵〳〵親の最期は格別。勘平が死んだ事必ず知らして下さるな。お主の爲に實つたる女房。この事聞いて不奉公せば。お主に不忠するも同然。只その儘にさし置かれよ。サア思ひ置く事なしと。地刀の切先咽にぐつとさし貫き。ッシかつぱと伏して息絶えたり。詞ヤアもう婿殿は死なしやつた。地扨も〳〵世の中に俺がやうな因果な者が又と一人あらうか。親父殿は死なしやる賴みに思ふ婿を先立て。いとし可愛の娘には生別れ。年寄つたるこの母が一人殘つて是がマア。何と生きてをられうぞ。詞コレ親父殿與市兵衛殿。地俺も一緒に連れて行て下されと。取付いては泣叫び。又立上つてコレ婿殿。母も倶にと縋付いては伏沈み。あちらでは泣きこちらでは泣きわつとばかりにどうど伏し。聲をばかりにッシ歎きしは目もあて。られぬ次第なり。地郷右衛門つつ立ち上り。詞ヤアこれ〳〵老母。歎かるゝは理なれども。勘平が最期の樣子。大星殿に委しく語り。入用金手渡しせば滿足あらん。地首にかけたるこの金は。婿と舅の七々日。四十九日や五十兩。合せて百兩百ケ日の追善供養跡懇ろに弔はれよさらば〳〵。おさらばと見送る涙見返る涙涙の。浪の立返る人も。はかなき三度。

第七

歌花に遊ばば祇園あたりの色揃へ。東方南方北方西方。彌陀の淨土か塗りに塗りたてぴつかりぴか〳〵。光りかゞやく白や藝妓にいかな粋めも。現ぬかして。ぐどんどろつくどろつくや ワイワイノ ナホス詞雖そ賴まう。亭主は居ぬか。亭主々々。是はいそがしいわ。どいつ樣ぢや。誰方樣ぢや。エ斧九太樣。御案内とはけうとい〳〵。イヤ初めてのお方を同道申した。きつう取込みさうに見えるが。一つ上げます座敷があるか。ござりますとも。今晩はかの由良大藍の御趣向で。名ある色達を摑込み。下座敷はふさがつてござり

ますれど。亭座敷があいてござります。そりや又蜘蛛の巣だらけであらう。又悪口を。イヤサよい年をして。女郎の蜘蛛の巣にかゝるまい用心。コリヤきついわ。下に置かれぬ二階座敷。ソレ灯をともせ仲居ども。お盃お煙草盆と。高い調子にかせかけて奥は騒ぎの太鼓三味。詞ナント伴内殿。由良之助が髄御覧じたか。九太夫殿。ありやいつそ氣遠ひでござる。段々貴様より御内通あつても。あれ程にあらうとは。主人師直も存ぜず。拙者に罷り上つて見屆け。心得ぬ事あらば。早速に知らせよと申付けましたが。さて〳〵〳〵我もへんしも折れましてござる。悴力彌めは何と致したな。此奴も折節この所へ參り倶に放埒。指合くらゐが不思議の一つ。今晩は底の底を探り見んと心巧を致して參つた。密々にお話申さう。いざ二階へ。まづ〳〵。然らばかうお出。三下り歌實は心に。思ひはせいで。あだな惚れた惚れたの口先はいかい。つやではあるわいな。詞彌五郎殿。喜多八殿。是が由良之助殿の遊び茶屋。一力と申すのでござる。コレサ平右衛門。よい時分に呼出さう。勝手に控へておゐやれ。畏りました宜しう頼上けまする。誰ぞちよと頼みたい。アイ〳〵誰方様ぢやえ。イヤ我々は由良殿に用事あつて參つた。奥へ行て云はうには。矢間十太郎。千崎彌五郎。竹森喜多八でござる。此間より節々迎ひの人を遣しますれども。お歸りのなき故。三人連で參りました。ちと御相談申さねばならぬ儀がござる程に。お逢ひなされて下されときつと申してくれ。それはなんとも氣の毒でござんす。由良様は三日以來飲み續け。お逢ひなされてから他愛はあるまい。本性はないぞえ。ハテ扨まあさう云うておくりやれ。アイ〳〵。彌五郎殿お聞きなされたか。承つて驚入りました。初めの程は敵へ聞かする計略と存じましたが。いかう遊びに實が入りすぎまして。合點が參らぬ。何とこの喜多八が申した通り魂が入替つてござらうがの。いつそ一間へ踏込み。イヤ〳〵とくと面談致した上。成程。然らば是に待ちませう。手の鳴る方へ。手の鳴る方へ。とらまよ。とらまよ。由良鬼やまたい。由良おにやまたい。捕らまへて酒飲まそ。捕らまへて酒飲まそ。コリヤ捕らまへたわ。サア酒々。銚子持て銚子持て。イヤコレ由良之助殿。矢間十太郎でござる。こりや何となさるゝ。南無三寶しまうた。ヲヽ氣の毒何と榮さん。ふしくたやうなお侍様方。お連様かいな。さあれば。お三人ともこはい顔して。イヤコレ女郎達。我我は大星殿へ用事あつて參つた。暫く座

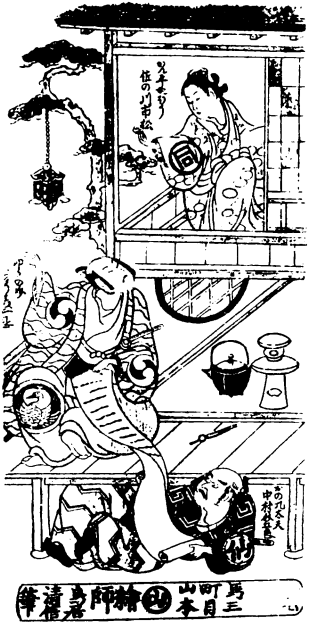
を立つて貰ひたい。そんな事でありそなもの。由良様奥へ行くぞえ。お前も早うお出で。皆様是にえ。由良之助殿。矢間十太郎でござる。竹森喜多八でござる。千崎彌五郎御意得に參つた。お目覺まされませう。是は打揃うてようお出でなされた。何と思うて。鎌倉へ打立つ時候はいつ頃でござるな。さればこそ。大事の事をお尋ねなれ。丹波與作が歌に　歌江戸三界へ行かんして　ナホス詞ハ、、、御免候へ他愛々々。三人ヤア酒の醉本性違はず。性根がつかずば三人が。酒の醉を覺さしませうかな。ヤレ聊爾なされまするな。憚りながら平右衛門めが。一言申上げたい儀がござります。暫くお控へ下されませう。由良之助様。寺岡平右衛門めでござります。御機嫌の體を拜しまして。いかばかり大悅に存じ奉ります。フウ寺岡平右衛とは。エ、何でえすか。前かど北國へお飛脚に行かれた。足の輕い足輕殿か。左様でござります。殿様の御切腹を北國にて承りまして。南無三寶と宙を飛んで歸りまする道にて。お家も召上げられ。一家中は散々と。承つた時の無念さ。奉公こそ足輕なれ。御恩は變らぬお主の仇。師直めを一討と鎌倉へ立越え。三ケ月が間非人となつて附狙ひましたれども。敵は用心嚴しく近寄る事も叶ひませず。所詮腹かつさばかんと存じましたが。國許の親の事を思出しまして。すご〳〵歸りました。所に。天道様のお知らせにや。いづれも様方の一味連判の様子承りまするとヤレ嬉しやありがたやと。取る物も取りあへず。あなた方の旅宿を訪ね。ひたすらお頼み申上げましたれば。でかしたうい奴ぢや。お頭へ願うてやろとお詞にすがり。是迄推參仕りました。師直屋敷の。アこれ〳〵〳〵。ア其許は足輕ではなうて。大きな口輕ぢやの。何と幇間なされぬか。尤もみたくしも。蚤の頭を斧で割つた程無念なとも存じて。四五十人一味を拵へて見たが。アあじな事の。よう思うて見

れば。仕損じたら此方の首がころり。仕畢せたら後で切腹。どちらでも死なねばならぬ。といふは人参飲んで首くゝるやうなもの。殊に其許は五兩に三人扶持の足輕。お腹は立てられな。はつち坊主の報謝米程取つてゐて。命を捨てて敵討しようとは。そりや青海苔貰うた穢に。太神樂を打つやうなもの。我等知行千五百石。貴様と比べると。敵の首を斗桝ではかる程取つても釣合はぬ釣合はぬ。所でやめた。ナ聞えたか。とかく浮世は音頭かうしたものぢや。ツヽテンツヽテンツテン。ナホス詞なぞと彈きかけた所はたまらぬ〳〵。是は由良之助様のお詞とも覺えませぬ。僅か三人扶持取る拙者めでも。千五百石の御自分様でも。繋ぎました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。押すに押されぬはお家の筋目。殿の御名代もなされまする。歴々様方の中へ見る影もない私めが。差加へてとお願ひ申すは憚りとも慮外とも。ほんの猿が人眞似。お草履をつかんでなりとも。お荷物をかついでなりとも參じませう。お供に召連れられて。ナ申し。コレ申し〳〵。是はしたり寝てござるさうな。コレサ平右衛門。あつたら口に風ひかすまい。由良之助は死人も同然。矢間殿。千崎殿。もう本心は見えましたか。申合せた通り計ひませうか。いかさま。一味連判の者共へのみせしめ。いざいづ

れもと立寄ろを。地ヤレ暫くと平右衛門押しなだめ傍へ寄り。詞つく〳〵思廻しますれば。主君にお別れなされてより。仇を報はんと種々の艱難。木にも茅にも心を置き。人の譏無念をば。ぢつと怺へてござるからは。酒でも無理に參らずば。是迄命も綾きますまい。地醒めての上の御分別と。無理に押へて三人を伴ふ一間は善悪の。明りを照らす障子の内影を隠すや 三味線 月の入る。地山科よりは一里半息を切つたる嫡子力彌。内をすかして正體なき父が寝姿。起すも人の耳近しと枕元に立寄つて。轡に代る刀の鍔音。鯉口ちやんと打鳴らせば。むつくと起きてヤア力彌か。詞鯉口の音驚かせしは急用あつてか。密に〳〵。只今御墓顔世様より。急の御飛脚密事の御狀。外に御口上はなかつたか。敵高師直歸國の願叶ひ。近々本國へ罷歸る。委細の儀はお文との御口上。よし〳〵。其方は宿へ歸り。夜の中に迎ひの駕籠行け〳〵。地はつとためらふ際もなくッシ山科さして引返す。地まづ様子氣遣ひと狀の封じを切る所へ。詞大星殿。由良殿。斧九太夫でござる。地御意得ませうと聲かけられ。詞是は久しや久しや。一年も逢はぬ中寄つたぞや寄つたぞや。額にその皺のばしにお出でか。アノこゝな莚破りめが。イヤ由良殿。大功は細瑾を顧ずと申すが。人の譏も構はず遊里の遊び。大功を立つる基。天晴大丈夫末頼もしう存ずる。ホヽヲ是は堅いわ堅いわ。石火矢とでかけた。さりとてはおかれい。イヤア由良之助殿とぼけまい。誠貴殿の放埒は。敵討つ術をと見えるか。おんでもない事。忝い。四十に餘つて色狂ひ。馬鹿者よ。氣違よと。笑はれうかと思うたに。敵討つ術をとは九太夫殿。ホヽヲ嬉しい嬉しい。スリヤ其許は。主人鹽冶の仇を報ずる所存はないか。けもない事けもない事。家國を渡す折から。城を枕に討死と言うたのは。御臺様への追從。時に貴様が。上へ對して朝敵同然と。其場をついと立つた。我等は後にと。しやちばつてゐた。いかいたわけの。所でしまひはつかず。御墓へ參つて切腹と。裏門からこそ〳〵〳〵。今この安樂の樂みするも貴殿のお蔭。昔のよしみは忘れぬ忘れぬ。堅みをやめて碎けをれ碎けをれ。いかさまこの九太夫も。昔思へば信太の狐。ばけ顯して一獻酌まうか。サア由良殿。久しぶりだお盃。又頂戴と會所めくのか。さしをれ飲むわ。飲みをれさすわ。てうど受けをれ地肴をするわと傍に在合ふ銷肴。はさんでッシずつと差出せば。詞手を出して。足を戴く銷肴。地忝いと戴いて食はんとする。手をじつと捕へ。詞コレ由良之助殿。明日

は主君鹽冶判官の御命日。取分け逮夜が大切と申すが。見事その肴貴殿は食ふか。食べる〳〵。但し主君鹽冶殿が。鮹になられたといふ便宜があつたか。ェ愚痴な人ではある。こなたや俺が浪人したは。判官殿が無分別から。スリャ恨こそあれ精進する氣微塵もごあらぬ。お志の肴賞玩致すと。地何氣もなく。只一口に味ふ風情。邪智深き九太夫もッシあきれて。詞もなかりける。詞扨この肴では飲めぬ飲めぬ。鶏しめさせ鍋燒させん。其許も奥へお出で。女郎ども歌へ〳〵と。謡足許もしどろもどろの浮拍子テレツク〳〵ツツテン〳〵。地おのれ末社ども。めれんになさで置くべきかと騒ぎに。紛れ入りにける。地始終を見屆け鷺坂伴内。二階より下り立ち。詞九太夫殿仔細とつくと見屆け申した。主の命日に精進をさへせぬ根性で。敵討存じもよらず。この通り主人師直へ申聞け。用心の門を開かせませう。成程最早用心にも及ばぬ事。コレサまだ此處に。刀を忘れて置きました。ほんに誠に大馬鹿者の證據。嗜みの魂見ましよ。扨靖びたりな赤鯰。ハ、、、、。いよ〳〵本心顯れ御安堵御安堵。ソレ九太夫が家來迎ひの駕籠。地はつと答へて持出る。詞サア伴内殿お召しなされ。まづ。御自分は老體。平に〳〵。ッシ然らば御免と乘り移る。詞イヤ九太殿。承ればこの所に。勘平が女房が勤めてをると聞きました。貴殿には御存じないか。九太夫殿。地九太夫殿と云へど答へずコハ不思議と。駕籠の簾を引き開くれば。内には手頃の庭の飛石。詞コリヤどうぢや。九太夫は松浦さよ姫をやられたと。地見廻すこなたの緣の下より。詞コレ〳〵伴内殿。九太夫が駕籠ぬけの計略は。最前力彌が持參せし書翰が心許なし。樣子見屆け後より知らさん。矢張り我らが歸る體にて。貴殿はその駕籠に引添うて。地合點々々とうなづき合ひ。駕籠には人のある體にッシ見せてしづ〳〵立歸る。ハルッシ折に二階へ。勘平が妻のおかるは醉ざまし。はや廓なれて吹く風に。ッシうさをはらして居る所へ。詞ちよと行て來る。由良之助ともあらう侍が。大事の刀を忘れて置いた。つい取つて來るその間に掛物もかけ直し。爐の炭もついておきや。アヽそれ〳〵。こちらの三味線踏折るまいぞ。是はしたり。九太は去なれたさうな。三下り歌父よ母よとなく聲聞けば。妻に鸚鵡の。うつせし言の葉。ェエ何ぢやいなおかしやんせ。ハルッシあたり見廻し由良之助。釣燈籠の明を照らし。讀む長文は御臺より敵の樣子細々と。女の文の後や先。ッシ〳〵〳〵ではかどらず。よその戀よと羨しくおかるは上より見お

ろせど。夜目遠目なりフシ字性もおぼろ。思付いたるのべ鏡。フシ出して寫して讀みとる文章。下家よりは九太夫が。繰りおろす文月影に。すかし讀むとは。神ならずほどけかゝりしおかるが簪。ばつたり落つれば。下にははつと見上げて後へ隱す文。緣の下には猫ゑつほ。上には鏡の影隱し。詞由良さんか。おかるか。そもじはそこに何してぞ。わたしやお前にもりつぶされ。あんまり辛さの醉ざまし。風に吹かれてゐるわいな。ムウ。ハテなう。よう風に吹かれてぢやの。イヤかる。ちと話したい事がある。屋根越しの天の川でこゝからは云はれぬ。ちよつと下りてたもらぬか。話したいとは頼みたい事かえ。まあそんなもの。廻つて來やんしよ。いや〳〵。段梯子へおりたらば。仲居が見付けて酒にせう。アヽどうせうな。アヽコレ〳〵幸ひこゝに丸ツ梯子。地これをふまへて下りてたもと。フシ小屋根にかければ。詞この梯子は勝手が違うて。ヲヽこは。どうやら是は危いもの。大事ない。大事ない。危いこはいは昔の事。三間づつまたげても赤膏藥も要らぬ年ばい。阿呆云はんすな。船に乘つたやうでこはいわいな。道理で舟玉樣が見える。ヲヽのぞかんすないな。洞庭の秋の月樣を拜み奉るぢや。イヤモウそんなら下りやせぬぞえ。下りざ下ろしてやらう。アレ又悪い事を。やかましい生娘かなんぞのやうに。地遊緣ながらと後よりぢつと。抱きしめフシ抱きおろし詞なんとそもじは御覽じたか。アイいゝえ。見たであらう見たであらう。アイ何ぢややら面白さうな文。あの上から皆讀んだか。ヲヽくど。アヽ身の上の大事とこそはなりにけり。何の事ぢやぞいな。何の事とはおかる。古いが惚れた。女房になつてたもらぬか。おかんせ嘘ぢや。サ嘘から出た實でなけ



れば根がとけぬ。おうと云やおうと云や。イヤ云ふまい。なぜ。お前のは嘘から出た實ぢやない。實から出た嘘ぢや。おかる請出さう。エヽ。嘘でない證據に。今宵の中に身請せう。ムウいやわしには。情夫があるなら添はしてやろ。そりやマアほんかえ。侍冥利。三日なりとも圍うたらそれからは勝手次第。ハアヽ嬉しうざざんすと云はしておいて笑をでの。いや直ぐに亭主に金渡し。今の間に埒ささう。氣遣ひせずと待つてゐや。そんなら必ず待つてをるぞえ。金渡して來る間。どつちへも行きやるな。女房ぢやぞ。それもたつた三日。それ合點。忝うござんす。三下り歌 世にも因果なものならわしが身ぢや。可愛い男に。いくせの思ひ。エヽなんぢやいなおかしやんせ。忍び音になく小夜千鳥。地奥で歌ふもッシ身の上とおかるは。思案とり〴〵の。地折に出合ふ平右衛門。詞妹でないか。マア兄様か。地恥かしい所で逢ひましたと顏を隱せば。詞苦しうない。關東より戻りがけ。母人に逢つて委しく聞いた。夫の爲お主の爲。よく賣られたでかしたでかした。地さう思うて下さんすりやわしや嬉しい。詞したがまあ喜んで下さんせ。思掛けなう今宵請出される筈。それが重疊。何人のお世話で。お前も御存じの大星由良之助様のお世話で。何ぢや由良之助殿に請出される。それは下地からの馴染か。何のいな。この中より二三度酒の相手。夫があらば添はしてやろ。暇が欲しくば暇やろと。結構すぎた身請。扨は其方を。早野勘平が女房と。イエ知らずぢやぞえ。親夫の恥なれば明かして何の云ひませう。ムウすりや本心放埒者。お主の仇を報ずる所存はないに極つたな。イエ〴〵これ兄様。あるぞえ〴〵。高うは云はれぬ。地コレかう〴〵と囁けば。詞ムウすりやその文をたしかに見たな。殘らず讀んだその後で。互ひに見合す顏と顏。それからぢやらつき出してつい身請けの相談。アノその文殘らず讀んだ後で。アイナ。ムウそれで聞えた。妹とてものがれぬ命。地身どもにくれよと拔打にはつしと切れば。詞ちやつと飛退き。コレ兄様。わしにはなに誤り。勘平といふ夫もあり。きつと兩親あるからはこな様の儘にもなるまい。地請出されて親夫に。逢はうと思ふがわしや樂み。どんな事でも謝らう。地赦して下んせ赦してと。手を合はすれば。平右衛門。拔身を捨てッシどうど伏し悲歎の涙にくれけるが。詞可愛や妹何にも知らぬな。親與市兵衛殿は六月廿九日の夜。人に切られてお果てなされた。ヤアそれはまあ。コリヤまだびつくりすな。請出されて添はうと思ふ勘平も。腹

切つて死んだはやい。地ヤア〳〵〳〵それはまあほんかいの。コレなう〳〵と取付いてスエテわつとばかりに泣沈む。詞ヲヲ道理々々。様子話せば長い事。おいたはしいは母者人。云出しては泣き。思出しては泣き。娘かるに聞かしたら泣死するであらう。必ず云うてくれるなとのお頼み。云ふまいと思へども。とても通れぬ汝が命。その譯は。忠義一途にこりかたまつた由良之助殿。勘平が女房と知らねば請出す義理もなし。元來色には猶ふけらず。見られた狀が一大事請出し刺殺す。思案の底と確かに見えた。よしさうなうても壁に耳。外より洩れても汝が科。密書を覗き見たるが誤り殺さにやならぬ。人手にかきようより我が手にかけ。大事を知つたる女。妹とて赦されずと。それを功に連判の數に入つてお供に立たん。地少身者の悲しさは人に勝れた心底を。見せねば數に入られぬ。聞分けて命をくれ死んでくれ妹と。事を分けたる兄の詞。おかるは始終せきあげせきあげ。便りのないは身の代を。役に立ての旅立か。暇乞にも見えそなものと。恨んでばつかりをりました。勿體ないが父様は非業の死でもお年の上。勘平殿は三十になるやならずに死ぬるのはさぞ悲しかろ口惜しかろ。逢ひたかつたであらうのに。なぜ逢はせては下さんせぬ。親夫の精進さへ知らぬ私が身の因果。何の生きてをりませう。お手にかゝらば母様がお前をお恨みなされましよ。自害したその後で。首なりと死骸なりと功に立つなら功にさんせ。地さらばでござる兄様と云ひつゝ刀取上ぐる。詞やれ待てしばしと地とゞむる人は由良之助。はつと驚く平右衛門。おかるは放して殺してと。あせるを押へて。詞ホウ兄弟とも見上げた疑ひ晴れた。兄は東の供を赦す。妹はながらへて。未來の追善。地サアその追善は冥途の供と。もぎ取る刀をしつかと持添へ。詞夫勘平連判には加へしかど。敵一人も討取らず。未來で主君に言

譯あるまじ。その言譯はコリヤこゝにと。地ぐつと突込む鬢の際間。下には九太夫肩先縫はれて七轉八倒。詞それ引出せの。地下知より早く絲先飛下り平右衛門。朱に染んだ身體をば無二無三に引ずり出し。ヒヤア九太夫めハテよい氣持と引立て目通りへ投付ければ。起立たせもせず由良之助。髻つかんでぐつと引寄せ。詞獅子身中の虫とは汝が事。我が君より高知を戴き。莫大の御恩をきながら。敵師直が間者となつてある事ない事よう内通ひろいだな。四十餘人の者どもは。親に別れ子に離れ。一生連添ふ女房を君傾城の勤めをさするも。亡君の仇を報じたさ。寢覺めにも現にも。御切腹の折からを思出して無念の涙。地五臟六腑をしぼりしぞや。詞取分け今宵は殿の逮夜。口にもろ〳〵の不淨を云うても。慎みに慎みを重ぬる由良之助に。よう魚肉をつきつけたなア。いやと云はれずおうと云はれぬ胸の苦しさ。三代相恩のお主の逮夜に。喉を通したその時の心どのやうにあらうと思ふ。五體も一度に惱亂し。四十四の骨々も碎くるやうにあつたわやい。地ヘエエ獄卒め魔王めと。土に摺付け捻ぢつけてスエテ無念涙にくれけるが。詞コリヤ平右衛門。最前錆刀を忘れおいたは此奴めを嬲殺しといふ知らせ。命取らずと苦痛させよ。地畏つたと抜くより早く躍上り飛上り。切れども僅か二

三寸。明所もなしに疵だらけ。のたうち廻つて。詞平右殿。おかる殿。地詫してたべと手を合せ。以前は足輕づれなりと。目にもかけざる寺岡に ッシ三拜するぞ見苦しき。詞この場で殺さば言譯むづかし。食ひ醉うた體にして。地舘へ連れよと羽織打着せ疵の口。隱れ聞いたる矢間千崎竹森が。障子ぐわらりと引開け。詞由良之助殿段々謝り入りましてござりまする。それ平右衞門。食ひ醉うたその客に。加茂川で水雜炊を食はせい。ハア。行け。長地母の思ひは山科の婿の力彌を力にて

第八　道行旅路の嫁入り

浮世とは。誰がいひ初めて。飛鳥川。ふちも知行も瀨とかはり。スエテよるべも浪の下人に。結ぶ鹽冶の誤りは。戀のかせ杭加古川の。娘小浪が許婚オクリ結納も。取らずその儘にふりすてられし物思ひ。地母の思ひは山科の婿の力彌を力にて住家へ押して嫁入りも。世にありなしの義理遠慮腰元連れず乘物も。やめて親子の二人連都の。オクリユリ へ空に。志す。ハルッシ雪の肌も。寒空は。寒紅梅の色添ひて。手先覺えず凍え坂。ハズミ薩埵峠にさしかゝり見返れば。富士の煙の。サハリ空に消え行方も知れぬ思ひをば。ナホス晴らす嫁入の ッシ門火ぞと。祝うて三保の松原に 小オクリつゞく。並松街道を狹しと打つたる行列は。誰と知らねどへ羨し。地アヽ世が世ならあの如く。一世の晴と花かざり。伊達をするがの府中過ぎ。城下。過ぐれば氣散じに。ッシ母の心もいそ〳〵と。二世の盃濟んで後。本ッシ閨の睦言私語。親知らず子知らずと。鳶の細道。もつれ合ひ。 ッシ嬶しからうと手を引けば。アノ 地母様の差合ひを脇へこかして鞠子川。宇津の山邊の現にも。殿御初めの新枕。瀨戸の染飯こはいやら。恥しいやら嬉しいやら案じて胸も大井川。水の流と人心。もしや心は變らぬか。日陰に花は咲かぬかと。 ッシいうて島田のうさはらし。二人ハルッシ我が身の上を。かくとだに。人しらずかの橋越えて行けば吉田や赤坂の。招く女の聲揃へ。二上リ歌緣を結ばゝ清水寺へ參らんせ。音羽の瀧にざんぶりざ毎日さう云うて拜まんせさうぢやいな。しゝきがんかうがかいれいにうきう。神樂太鼓にヨイコノエイ。こちの晝寢を覺まされた。都殿御に逢うて辛さが語りたやソウトモソウトモ。もしも女夫とかゝさまならば伊勢さんのひきあはせ。ナホスハルッシ鄙びた顏も。身にとつて。よい吉左右になるみ潟。熱田の社。 ッシあれかとよ。七里の渡し帆を上げて艪拍子揃へてヤッシッシ。舵取る音は。鈴虫かいや。ヒロヒきりぎりす。なくや霜夜と詠みたるは。小夜更けてこそくれ迄と。限

りある舟急がんと母が走れば。娘も走りオクリ空の籠に笠覆ひ。ハルヲシ舟路の友の。後や先庄野龜山せきとむる。伊勢と吾妻の別れ道。驛路の鈴の鈴鹿越え。間の土山。雨が降る水口の葉に。云ひはやす。石部石場で大石や。小石拾うて我が夫となでつ。さすりつ手に据ゑて。やがて大津や三井寺の。麓を越えて山科へ程なき。里へ。三度いそぎ行く。

第九

地風雅でもなく。洒落でなく。しよう事なしの山科に。由良之助が侘住居。祇園の茶屋に昨日から雪の夜明し朝戻り。幇間仲居に送られて酒が。ほたえる雪轉し雪はこけいで雪こかされ。仁體捨てし遊びなり。詞旦那。申し旦那。お座敷の景ようございます。お庭の藪に雪持つてトなつた所。とんと繪に畫いた通り。けうといぢやないかなうお品。サアこの景を見て。外へはどつちへも行きたうございますまいがな。ヘツ朝夕に見ればこそあれ住吉の。岸の向ひの淡路島山といふ事知らぬか。自慢の庭でも家の酒は飲めぬ飲めぬ。エヽ通らぬ奴〳〵サア〳〵奥へ奥へ。地奥はどこにぞお客があると。先に立つて飛石の。詞もしどろ足取りもオクリしどろに。見ゆる酒機嫌。お戻りさうなと女房のお石が輕う汲んで出る茶屋の茶よりも氣の端香。お寒からうと惜氣せぬ詞の鹽茶醉ざまし。地一口飲んであとうちあけ。詞エヽ奥無粹なぞや無粹なぞや。折角面白う醉うた酒さませとは。アヽアヽ降つたる雪かな。文獨詞いかによそのわろ達がさぞ惜氣とや見給ふやらん。地それ雪は打綿に似て飛んで中入りとなり。詞奥はかゝ樣と云へばとつと世帶じむと云へり。地加賀の二布へお見舞のナオス詞遲いは御用捨。伊勢海老と盃。穴の稻荷の玉垣は。朱うなければ信がさめるといふやうなものかい。オイこれ〳〵〳〵。こぶら返りぢや足の大指折つた折つた。おつとよし〳〵。地序にかうぢやと足先で。詞アヽこれほたへさしやんすな嗜ましやんせ。酒がすぎると他愛がない。地ほんに世話でござらうのとフシ物和かにあひしらふ。地力彌が心得奥より立出で。詞申し〳〵母人。親父樣は御寢なつたか。地是上げられいと差出す親子が所作を塗分けても。下地は同じ桐枕。ヲヽヲヽおうは夢現。詞イヤもう皆去にやれ。ハイ〳〵〳〵。そんならば旦那へ宜しう。地若旦那ちと御出でを目遣ひでフシ去際惡う歸りける。地聲聞えぬ迄行過ぎさせ。由良之助枕を上げ。詞ヤア力彌。遊興に事寄せ丸めたこの雪。所存あつての事ぢやが何と心得たぞ。ハツ雪と申す

物は。降る時には少しの風にも散り。輕い身でござりませうとも。あの如く一致して丸まつた時は。峰の吹雪に岩をも碎く大石同然。重いは忠義。その重い忠義を思ひ丸めた雪も。餘り日數を。延しすごしてはと思召しての。イヤ〳〵。由良之助親子。原郷右衛門などと四十七人連判の人數は。皆主なしの日陰者。日陰にさへ置けばとけぬ雪。せく事はないといふ事。こゝは日當り奥の小庭へ入れて置け。盤を集め雪を積むも學者の心ながき例。女ども。切戸内から開けてやりやれ。地堺への狀認めん。詞飛脚が來たらば知らせいよ。アイ〳〵。地間の切戸の内。雪轉かし込み戸をたつるオクリ襖へ引立て入りにける。地人の心の奥深き山科の隱家を。訪ねてこゝに來る人は。加古川本藏行國が女房戸無瀬。道の案内の乘物をかたへに待たせ只一人。刀脇差さすが實に行儀亂さず。ハルフシ庵の戸口。地頼みませう頼みませうといふ聲に。地襖はづして飛んで出る。昔の奏者今のりん。フシどうれと云ふもつかうどなる。詞ハツ大星由良之助様お宅は是かな。左様ならば加古川本藏が女房戸無瀬でござります。誠にその後は打絶えました。ちとお目にかゝりたい様子につきはる〴〵參りました。傳へられて下されと地云入れさせて表の方。フシ乘物是へと舁寄せさせ。地娘こゝへと呼出せば。谷の戸あけて鶯の梅見付けたるほゝ笑顔オクリ目深に。着たる帽子の内。詞アノ力彌様のお屋敷はもうこゝかえ。フシわしや恥かしいと媚かし。地取散らす物片付けて。まづお通りなされませと。下女が傳へる口上に。詞駕籠の者は皆歸れ。地御案内頼みますと云ふもいそ〳〵娘の小浪。フシ母に付添ひ座に直れば。地お石しとやかに出迎ひ。地是は〳〵。お二方ともようぞやお出で。とくよりお目にかゝる筈。お聞及びの今の身の上。お訪ねに預りお恥かしい。詞あの改つたお詞。お目にかゝるは今日初めなれど。先だつて御子息力彌殿に。娘小浪を許婚致したからは。お前なり私なり。地姫同士御遠慮には及ばぬ事。詞是は〳〵痛入る御挨拶。殊に御用繁い本藏様の奥方。寒空といひ思掛けなき御上京。戸無瀬様はともあれ小浪御寮。さぞ都珍しからう。祇園清水智恩院。大佛様御覽じたか。金閣寺拜見あらばよい傳手があるぞえと。地心置きなき挨拶に。只あい〳〵しく口の内。フシ帽子まばゆき風情なり。地戸無瀬は行儀改めて。詞今日參る事餘の儀に非ず。是なる娘小浪許婚致して。後御主人鹽冶殿不慮の儀につき。由良之助様。力彌殿。御在所も定かならず。地移り變るは世の習。變らぬは親心

とやかくと聞合せ。詞この山科にござる由承りました故。此方にも時分の娘早うお渡し申したさ。近頃押付けがましいが。夫も參る筈なれど出仕に隙のない身の上。この二腰は夫が魂。是を差せば即ち夫本藏が名代。私が役の二人前。由良之助様にも御意得まし。祝言させて落付きたい。地幸ひ今日は日柄もよし。御用意なされッシ下さりませと相述ぶる。詞是は思ひも寄らぬ仰せ。折悪う夫由良之助は他行。さりながらもし宿にをりましてお目にかゝり申さうならば。御親切の段千萬忝う存じまする。許婚致した時は。故殿様の御恩にあづかり。御知行頂戴致し罷りある故。本藏様の娘御を貰ひませう。然らばくれうと云ひ約束は申したれども。只今は浪人。人使ひとてもござらぬ内へ。いかに約束なればとて。大身な加古川殿の御息女。世話に申す提燈に釣鐘釣合はぬは不縁のもと。ハテ結納を遣したと申すではなし。どれへなりと外々へ。御遠慮なう遣はされませと申さるゝでござりませうと。地聞いてはつと思ひながら。詞アノまあお石様のおつしやる事。いかに卑下なされうとて。本藏と由良之助様。身上が釣合はぬとな。そんならば申しませう。手前の主人は小身故。家老を勤むる本藏は五百石。鹽冶殿は大名。御家老の由良之助様は千五百石。すりや本藏が知行とは。千石違ふを合點で許婚はなされぬか。只今は御浪人。本藏が知行とは皆違うてからが五百石。イヤそのお詞違ひまする。五百石は扨置き。一萬石違うても。心と心が釣合へば大身の娘でも嫁にとるまいものでもない。こりや聞きどころお石様。心と心が釣合はぬとおつしやるは。どの心ぢやサア聞かう。主人鹽冶判官様の御生害御短慮とは云ひながら。正直を本とするお心から發りし事。それにひきかへ師直に金銀を以てこびへつらふ。追從武士の祿を取る本藏殿と。二君に仕へぬ由良之助が大事の子に。地釣合はぬ女房は持たされぬと。聞きもあへず膝立直し。詞詔武士とは誰が事。様子によつては聞捨てられぬそこを赦すが娘の可愛さ。夫に負けるは女房の常。地祝言あらうがあるまいが。許婚とあるからは天下晴れての力彌が女房。詞ム、面白い。女房ならば夫が去る。力彌に代つてこの母が去つた。地去つたと云放し。心隔ての唐紙をッシはたと。引立て入りにける。地娘はわつと泣出し。折角思ひ思はれて許婚した力彌様に。逢はせてやろとのお詞を便りに思うて來たものを。姑御の胴慾に。詞去られる覺えわたしやない。地母様どうぞ詫言して。祝言させて下さりませとスエテすがり。歎けば母親

は。娘の顔をつく〳〵と。打眺め〳〵。親の慾目か知らねどもほんに其方の器量なら。十人並にも勝つた娘。よい婿をがなと詮議して許婚した力彌殿。訪ねて來た甲斐もなう。婿に知らさず去つたとは。義理にも云はれぬお石殿姑去りは心得ぬ。詞ムウ〳〵扨は浪人の身のよるべなう筋目を云立て。有德な町人の婿になつて。義理も法も忘れたな。ナウ小浪。今云ふ通りの男の性根。去つたといふ面。欲しがる所は山々。外へ嫁入りする氣はないか。コレ大事の所泣かずともしつかりと返事しや。地コレどうぢや〳〵と。尋ぬる親の氣は張弓。アノ母様の胴慾な事おつしやります。國を出る折父様のおしやつたは。浪人しても大星力彌。行儀といひ器量といひ。幸な婿を取つた。貞女兩夫に見えず。サハリたとへ夫に別れても又の夫を設けなよ。主ある女の不義同然。必ず〳〵寢覺めにも殿御大事を忘るるな。由良之助夫婦の衆へ孝行盡し夫婦仲。睦じいとてあじやらにも。吝氣ばしして ナホスフシ去らるゝな。地案ぜうかとて隱さずと懐姙になつたら早速に。知らせてくれとおつしやつたをわたしやようさとしてゐる。去られていんで父様に。苦に苦をかけてどう云うてどう言譯があらうとも。力彌様より外に餘の殿御。わしやいや〳〵と一筋に ッシ戀を立貫く心根を。地サハリ聞くに堪えかね母親の。涙一途に突詰めし。覺悟の刀抜放せば。母様是は何事と押留められて顔を上げ。詞何事とは曲がない。今もそなたが云ふ通り。一時も早う祝言させ。初孫の顔見たいと。娘に甘いは父の習ひ。地喜んでござる中へまだ祝言もせぬ先に。去られて戻りましたとてどう連れていなれうぞ。と云うて先に合點せにや ッシしやう。もやうもないわいの。地殊にそなたは先妻の子。わしとは生さぬ仲ぢや故およそにしたかと思はれては。どうも生きてはゐられぬ義理。この通り死んだ後で父御へ言譯してたもや。詞アノ勿體ない事おつしやります。殿御に嫌はれ私こそ死すべき筈。地生きてお世話になる上に苦を見せます不孝者。母様の手にかけて私を殺して下さりませ。去られても殿御の家こゝで死ぬれば本望ぢや。早う殺して下さりませ。詞ヲヽよう云やつたでかしやつた。そなたばかり殺しはせぬ。この母も三途の友。そなたをおれが手にかけて。母も追付け後から行く。地覺悟はよいかと立派にも涙。とゞめて立ちかゝり。詞コレ小浪。アレあれを聞きや。表に虚無僧の尺八。鶴の巣籠り。地鳥類でさへ子を思ふに科もない子を手にかけるは。因果と因果の寄合と。思へば足も立ちかねて。

震ふ拳をやう〳〵に。振上ぐる刄の下。尋常に座を占め手を合せ。詞南無阿彌陀佛と。地唱ふる中より御無用と。擊かけられて思はずも。たるみし拳も尺八もフシともに。ひつそと靜まりしが。詞ヲヽさうぢや。今御無用と留めたは。虚無僧の尺八よな。助けたいが山々で。無用といふに氣おくれし。未練なと笑はれな。地娘覺悟はよいかやと又振上ぐる又吹出す。とたんの拍子に又御無用。詞ムヽ又御無用と留めたは。修行者の手の内か。振上げた手の中か。イウ刀の手の中御無用。倅力彌に祝言させう。エヽさう云ふ擊はお石樣。地そりや眞實か誠かと尋ぬる襖の内よりも。詞あひに相生の。松こそめでたかりけれと。地祝儀の小謠白木の小四方。フシ目八分に携へ出で。詞義理ある仲の一人娘。殺さうと迄思詰めた戸無瀬樣の心底。小浪殿の貞女。志がいとほしさにさせ悪い祝言さすその代り。世の常ならぬ嫁の盃。地受取るはこの三方。フシ御用意あらばと差置けば。地少しは心休まりて拔いたる刀鞘に納め。詞世の常ならぬ盃とは。引出物の御所望ならん。この二腰は夫が重代。刀は正宗。差添は波の平行安。家にも身にも代へぬ重寶。地是を引出と皆まで云はさず。詞浪人と侮つて價の高い二腰。まさかの時に賣拂べと云はぬばかりの婿引出。御所望申すは是ではない。ムヽそんなら何が御所望ぞ。この三方へは加古川本藏殿の。お首を乘せて貰ひたい。エヽそりや又なぜな。御主人鹽冶判官樣高師直にお恨あつて。鎌倉殿で一刀に切りかけ給ふ。その時こなたの夫加古川本藏。その座にあつて抱留め。殿を支へたばかりに御本望も遂げられず。敵は漸く薄手ばかり。殿はやみ〳〵御切腹。口へこそ出し給はね。その時の御無念は。本藏殿に憎しみがかゝるまいか。あるまいか。家來が身として加古川が娘。安閑と女房にするやうな力彌ぢやと。思うての祝言ならば。この三方へ本藏殿の白髮首。いやとあればどなたでも。首を並べる尉と嫗。それ見た上で盃させう。サヽサアいやか。地おうかの返答をと。鋭き詞の理屈詰。親子ははつと フシさしうつむき途方に。くれし折柄に。詞加古川本藏が首進上申す。お受取りなされよと地表に控へし虚無僧の。笠脫捨ててしづ〳〵と内へ入るは。詞ヤアお前は父樣。本藏樣。地こゝにはどうしてこの形は。合點がいかぬこりやどうぢやと咎むる女房。詞ヤアざは〳〵と見苦しい。始終の仔細皆聞いた。そち達に知らさずこゝへ來た樣子は追つて。まづ黙れ。其許が由良之助殿御内證お石殿よな。今日の時宜かくあらんと思ひ。妻子

にも知らせず。様子を窺ふ加古川本藏。案に違はず拙者が首。婿引出に欲しいとな。ハヽヽヽ。いやはやそりや侍の云ふ事。主人の仇を報はんといふ所存もなく。遊興に耽り大酒に性根を亂し。放埒なる身持日本一の阿呆の鑑。蛙の子は蛙になる。親に劣らぬ力彌めが大だはけ。狼狽武士のなまくら鋼。この本藏が首は切れぬ。馬鹿つくすなと踏碎く。地破三方のふち放れ。こつちから婿に取らぬちよこざいな女めと云はせも果てず。詞ヤア過言なぞ本藏殿。浪人の錆刀切れるか切れぬか鹽梅見せう。不肖ながら由良之助が女房。地望む相手ぢやサア勝負。勝負々々と裾引上げ。長押にかけたる槍押取り。突きかゝらんずその氣色。これ御短慮なマア待つてと留め隔つる女房娘。詞邪魔ひろぐなと荒けなく。右と左へ引退くる。間もあらせず突掛くる槍のしほ首引掴みもぢつて拂へば身を背け。諸足縫はんとひらめかす。刃背を蹴つて蹴上ぐれば。拳放れて取落す。地槍奪はれじと走り寄る。腰際帶際引掴み。どうと打付け動かせず。膝に引敷く强氣の本藏。敷かれてお石が無念の齒がみ。親子ははあ〳〵ッシあやぶむ中へ。地駈出る大星力彌。捨てたる槍を取る手も見せず本藏が。右手の肋左手へ通れと突通す。うんとばかりにかつぱと伏す。コハ情なやと母娘スエテ取付き。歎くに目もかけず。止め刺さんと取直す。詞ヤア待て力彌早まるなと。地槍引留めて由良之助手負に向ひ。詞一別以來珍らしし本藏殿。御計略の念願屆き。婿力彌が手にかゝつて。さぞ本望でござらうのと。地星をさいたる大星が。詞に本藏目を見開き。詞主人の讐憤を晴さんとこの程の心遣ひ。遊所の出合に氣をゆるませ。徒黨の人數は揃ひつらん。思へば貴殿の身の上は。本藏が身にあるべき筈。當春鶴ケ岡造營の砌。主人桃井若狹之助。高師直に恥しめられ。以ての外憤り。某を密に召され。まつかう〳〵の物語。明日御殿にて出會せ。一刀に討留むると思詰めたる御顏色。地留めても留まらぬ若氣の短慮。詞小身故に師直に。賄賂薄きを根に持つて。恥しめたると知つたる故。主人に知らせず不相應の金銀衣服豪の物。師直へ持參して。心に染まぬ諂ひも主人を大事と存ずるから。賄賂畢せあつちから謝つて出た故に。切るに切られぬ拍子拔け。主人が恨もさらりと晴れ。地相手代つて鹽冶殿の。雜儀となつたは即ちその日。詞相手死せずば切腹にも及ぶまじと。抱留めたは思過した本藏が。地一生の誤りは娘が雜儀と白髮のこの首。婿殿にッシ進ぜたさ。女房娘を先へ上し。こび諂ひしを身の科にお

暇を願うてな。道を變へて汝達より二日前に京着。若い折の遊藝が役に立つた四日の中。こなたの所存を見拔いた本藏。手にかゝれば恨を晴れ。約束の通りこの娘。地力彌に添はせて下さらば未來永劫御恩は忘れぬ。詞コレ手を合せて賴入る。地忠義にならでは捨てぬ命。子故に捨つる親心推量あれ由良之助殿と云ふも涙にむせ返れば。妻や娘はあるにもあられず。ほんにかうとはつゆ知らず死遲れたばつかりに。お命捨つるはあんまりな。冥加の程が恐ろしい。赦して下され父上とスエテかつぱと伏して。泣叫ぶ。地親子が心思遣り大星親子三人も。フシ俱にしをれてゐたりしが。地ヤア〳〵本藏殿。君子は其罪を憎んで其人を憎まずと云へば。緣は緣恨は恨と。格別の沙汰もあるべきにとさぞお恨に思はれんが。所詮この世を去る人。底意を明けて見せ申さんと。地未然を察して奥庭の障子さらりと引開くれば。雪を束ねて石塔の五輪の形を二つ迄。造り立てしは大星が。フシ成り行く果をあらはせり。地戸無瀨はさかしく。詞ムヽ御主人の仇を討つて後。二君に仕へず消ゆるといふお心のあの雪。力彌殿もその心で娘を去つたの胴慾は。御不便餘つてお石樣。恨んだがわしや悲しい。戸無瀨樣のおつしやる事。玉椿の八千代迄とも祝はれず。後家になる嫁取つた。地このやうなめでたい悲しい。フシ事はない。詞ノリかういふ事が厭さに。むごう辛う云うたのが。さぞ憎かつたでござんしよなう。イヽエイナ。私こそ腹立つまゝ。町人の婿になつて義理も法も忘れたかといふたのが。恥かしいやら悲しいやらどうも顏が上げられぬお石樣。戸無瀨樣。氏も器量も勝れた子何としてこのやうに。地果報拙い生れやとフシ聲も。涙にせき上ぐる。地本藏熱き涙を押へ。ハツアヽ嬉しや本望や。詞吳王を諫めて誅せられ。辱めを笑ひし吳子胥が忠義取るに足らず。忠臣の鑑とは唐土の豫讓。日本の大星。昔より今に至る迄。唐と日本にたつた二人。地その一人を親に持つ。力彌が妻となつたゝは。女御更衣に供るより。百倍勝つて汝が身は武士の娘の手柄者。手柄な娘が婿殿へ。お引の目錄進上と懷中より取出すを。力彌取つて押戴き披き見ればコハいかに。目錄ならぬ師直が屋敷の案内一々に。玄關長屋侍部屋。水門物置柴部屋まで繪圖に委しく書付けたり。由良之助はつと押戴き。詞ヘツエ有難し有難し。徒黨の人數は揃へども。敵地の案内知れざる故發足も延引せり。この繪圖こそは孫吳が祕書。我が爲の六韜三略。地喜んで夜討と定めたれば。繩梯子にて塀を越え忍入るには緣側の。

雨戸はづせば直ぐに居間。こゝを仕切つてかう攻めてと　フシ親子が喜び。地手負ながらもぬからぬ本藏。詞イヤ〳〵それは僻言ならん。用心嚴しき高師直。障子襖は皆尻差し。雨戸に合栓合樞。こちて外れず大槌にて。毀たば音して用意せんそれ如何。地ヲヽそれにこそ衛あれ。詞凝つては思案に能はずと遊所よりの歸るさ。思寄つたる前栽の雪持つ竹。雨戸をはづす我が工夫。地仕樣をこゝに見せ申さんオクリと庭に。折しも雪深くさしもに强き大竹も雪の重さに。ひいはりとしはりし竹を。引廻して鴨居にはめ。雪にたはむは弓同然。詞この如く弓を拵へ弦を張り。鴨居と敷居にはめ置きて。一度に切つて放つ時は。地まつこのやうにと。積つたる枝打拂へば雪散つて。伸びるは直なる竹の力鴨居撓んで溝はづれ。障子殘らずばた〳〵。本藏苦しさ打忘れハヽアしたり〳〵。詞計略といひ義心といひか程の家來を持ちながら了簡もあるべきに。地淺きたくみの鹽冶殿。口惜しき振舞やと。悔むを聞くに御主人の短慮なる御所業。今の忠義を戰場のお馬先にて盡くさばと。思へば無念に閉ぢふさがる。胸は七重の門の戸を洩るゝは涙ばかりなり。地力彌はしづ〳〵下り立ちて父が前に手をつかへ。詞本藏殿の寸志により。敵地の案内知つたる上は。泉州堺の天河屋義平方へも通達し。荷物の工面仕らんと聞きもあへず何さ〳〵。山科にある事隱れなき由良之助。人數集めは人目あり。一先づ堺へ下つて後あれからすぐに發足せん。其方は母嫁戸無瀨殿と諸共に。後の片着き諸事萬事何もかも。心殘のなきやうに。ナ。ナ。地コリヤ明日の夜舟に下るべし。我は幸ひ。本藏殿の忍び姿を我が姿と。袈裟打かけて編笠に。恩を戴く報謝返し未來の迷晴らさん爲。詞今宵一夜は嫁御寮へ舅が情の。地戀慕流し。歌口しめして立出れば。豫て覺悟のお石が歎き。御本望をとばかりにて名殘り惜しさの山々を云はぬ心の　フシいぢらしさ。地手負は今を知死期時。父樣申し父樣と呼べど。答へぬ斷末魔。親子の緣も玉の緒も切れて一世の。　フシカヽリうき別れわつと泣く母泣く娘。俱に死骸に向ひ地の。回向念佛は戀無常。出行く足も立留り。六字の御名を笛の音に。詞南無阿彌陀佛。地南無阿彌陀これや尺八煩惱の枕並ぶる追善供養。閨の契りは一夜きり心。殘して。三重へ立出る

第十

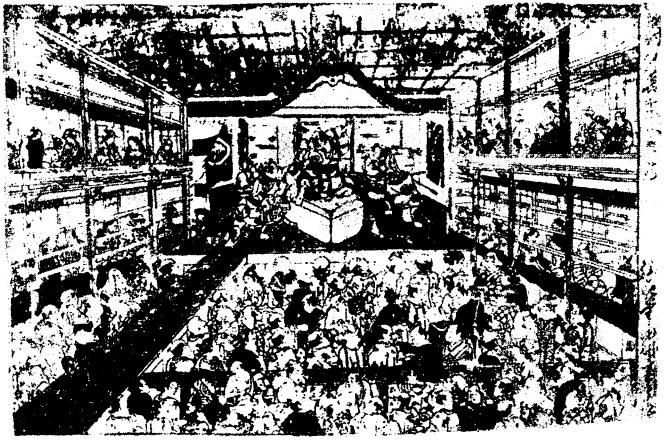
地津の國と和泉河內を引受けて。餘所の國まで舟寄せる三國一の大湊。堺というて人の氣も賢しき町に疵もなき。天河屋

の義平とて金から金を儲けため。見かけは輕く內證は重い生計に重荷をば。手づから店でしめくゝり大船の船頭。詞是で丁度七竿。地受取りましたとさし荷ひ。行くも黃昏亭主はほつと。口和もよしよい出船と。云ひつゝ煙草煙管筒。フシ喫付けにこそ入りにけれ。地家の世繼は今年四つ守りは十九の丸額。親方よりも我が遊び。詞サア始りぢや。面白い事面白い事。泣き辨慶の信太妻。東西々々。文彌ハルフシこゝに哀を。とゞめしは。この由松にとゞめたり。詞元來その身は父ばかり。母は去られて。いなれたで。フシ泣き辨慶と申すなり。詞コリヤ伊五よ。もう人形廻しいやいや。母樣を呼んでくれいやい。ソレそのやうに無理云はしやると。旦那樣に云うてこなさんも追出すぞ。後の月からお釜が割れて。手代は手代で鼠の子か何ぞのやうに。目が明かぬと云うて追出し。飯焚きは大きな欠伸したと云うて暇やり。今ではこなはんと。わしと旦那はんとばつかり。どうでこの家を拔けそけするのかしして。ちよこ〳〵と船へ荷物が行く。駈落するなら人形箱持つて行かうぞや。イヤ人形廻しよりおりやもう寢たい。アレもう俺までをそゝのかす程にの。宜ござるわ俺が抱いて寢てやろ。いやぢやぢや。われには乳が無いものおりやいやぢや。アレ又無理云はしやる。こなたが女の子なら。乳よりよいものがあるけれど。何というても相婿同士。フシ是も涙の種ぞかし。地折節表へ侍二人誰そ賴まう義平殿はお宿にかと。云ふもひそめく內からつこど。詞旦那樣は家に。我等。サハリ人形廻しで忙がしい。ナボス詞用があらば入つた〳〵。イヤ案內致さぬも無禮。原鄕右衞門大星力彌。密に御意得たしと申しておくりやれ。何ぢや腹へり右衞門大飯食や。こりやたまらぬアレ旦那樣大きな健氣人が見えましたと。地叫ぶ由松引連れてフシ奧へ入れば。地亭主義平。詞又阿呆めがしやなり聲と。地云ひつゝ出でて。詞エ鄕右衞門樣力彌樣。サアまあ是へ。地御免あれと座を占めて鄕右衞門。詞段々貴公のお世話萬事相調ひ。由良之助も御禮に參る筈なれども。鎌倉へ出立も今明日。なにかと取込み悴力彌を名代として失禮のお斷り。是は〳〵御念の入つた儀。急の御發足とござりますれば。なにかお取込みでござりませうに。成程鄕右衞門殿の仰せの通り。明早々出立の取込み。自由ながら私に參りお禮も申し。又お賴み申した殘荷物も。いよ〳〵今晩で積みじまひか。お尋ね申せと申渡しましてござります。成程お誂へのかの道具一まき。段々大廻しで遣はし小手脛當小道具の類は。長持に仕込み以下

七竿。今晩出船を幸ひ船頭へ渡し。殘る縮提燈鎖鉢卷。是は後より陸荷で遣す心算でござります。郷右衛門様お聞きなされましたか。いかいお世話でござりまする。いかさま主人鹽冶公の御恩を受けた町人も多くござれども。天河屋の義平は。武士も及ばぬ男氣な者と。由良殿が見込み大事をお頼み申されたも尤も。然し槍長刀は格別鎖帷子の繼梯子のと申すものは常ならぬ道具。お買ひなさるゝに不思議は立ちませなんだか。イヤその儀は。細工人へ手前の所を申さず。手附けを渡し金と引替に仕る故。何國の誰と先様には存じませぬ。成程尤も。序に力彌めもお尋ね申しましよ。家へ荷物を取込み荷物の拵へ御家來中の見る目はどうしてお忍びなされましたな。ホウそれも御尤ものお尋ね。この儀を頼まれますると。女房は親里へ歸し。召使はたりひづみを付けて段々に暇遣はし。殘るは阿呆と四つになる悴。洩るゝ筋はござりませぬ。扨々驚き入りましてござりまする。その旨を親どもへ申聞かして安堵させませう。郷右衛門殿お立ちなされませぬか。いかさま出立に心せきまする。義平殿お暇申しませう。然らば由良之助様へも。宜しう申聞かしませう。おさらば。地さらばと引別れ ッシ二人は旅宿へ立歸る。地表閉めんとする所へこの家の舅太田了竹。詞オット閉めまい宿にかと。地すつと通つてきよろ〳〵眼。詞是は親父様ようこそお出で。扨この間は女房その養生がてら遣はし置きさぞお世話お藥でもたべまするかな。ア藥も飲みまする食も食ひます。それは重疊。イヤ重疊ではござらぬ。手前も國許に居た時は。斧九太夫から扶持も貰ひ相應な身代。今は一僕さへ召使はぬ所へさしてもない病氣な養生さしてくれよとさし越されたは。仔細こそあらん。がそれはともあれ。なま若い女不埒があつては貴殿も立たず。身共も皺腹でも切らねばならぬ。所で一つの相談。先づ世間は暇やり分。暇の狀をおこしておいて。ハテ何時でもこゝの勝手に呼戻すまでの事。たつた一筆ついで書いて下されと。地輕う云ふのも物工。一物ありと知りながら。厭と云はば女房をすぐに戻さん戻りては。頼まれた人々へ詞も立たずととつおいつ思案する程。詞厭かどうちや不得心なら此方にも。片時おかれず戻すからはこの了竹もにじり込みへたばつて俱に厄介厭か應かの返答と。地込付けられて流石の義平。計に乘るが口惜しやと。思へどこちらの一大事見出されてはかけ硯。取つて引寄せさら〳〵と。ッシ書認め。詞是やるからは了竹殿親でなし子でなし。重ねて足

踏みおしやんな。底工ある暇の狀。弱身を食うてやるが殘念。持つていきやれと投付くれば。地手早く取つて懐中し。詞ヲヽよい推量。聞けばこの間より浪人共が入込みひそめくより。そのめに問へども知らぬとぬかす。何仕出さうも知れぬ婿。娘を添はして置くが氣遣ひ。幸ひさる歴々から貰ひかけられ。去狀取るとすぐに嫁入さする相談。一杯まゐつて重疊重疊。ホウたとへ去狀なきとても子までなしたる夫を捨て。外へ嫁入する性根なら心は殘らぬ勝手々々。ヲヽ勝手にするは親のこうけ。今宵の中に嫁らする。ヤア細事はかずと早歸れと。地肩先つかんで門口より。外へ蹴出してあとぴつしやり。ほう〳〵起きて詞コリヤ義平なんぼ掴んでほり出しても。嫁らす先から仕拵へ金。温つて蹴られたりや。どうやら疝氣が直つたと。地口は達者に足腰をなでつさすりつ逃吠に。オクリつぶやきへつぶやき立歸る。地月の疊に影隱す隣家も寢すればさし心得門の戸せはしく打叩く。誰ぢや〳〵も及び腰。詞イヤ宵に來た大入る亥の刻過ぎ。この家を目がけて捕手の人數十手早縄腰提燈。灯かゞ隱して窺ひ窺ひ間者とおぼしき家來を招き。耳打船の船頭でござる。舟賃の算用が違うた。ちよつと開けて下され。ハテ仰山な僅な事であろ明日來た明日來た。イヤ今夜浮

ける船。仕切つて貰はにや出されませぬと。増云ふも磐高近所の聞えと。義平立出で何心なく門の戸を。開くるとその儘捕つた捕つた。動くな上意と押取巻く。コハ何故と四方八方。眼を配れば捕手の兩人。詞ヤア何故とは横道者。汝鹽冶判官が家來大星由良之助に頼まれ。武具馬具を買調へ大廻しにて鎌倉へ遣はす條。急ぎ召捕り拷問せよとの御上意。遁れぬ所ぢや腕廻せ。是は思ひも寄らぬお咎め。さやうの覺え聊かなし。増定めてそれは人違へと云はせもたてず。詞ヤアぬかすまい爭はれぬ證據あり。ソレ家來ども。はつと心得持來たる。宵に積んだる筵莚荷の長持。見るより義平は心も空。ソレ動かすなと四方の十手。その間に荷物切解き。長持開けんとする所を。飛びかゝつて下部を蹴退け。蓋の上にどつかと坐り。詞ヤア麁忽千萬。この長持の中に入置いたは。さる大名の奥方より。お誂へのお手道具。お具足櫃の笑ひ本。笑ひ道具の注文までその名を記し置いたれば。開けさしては歴々のお家のお名の出る事。御覽あつてはいづれものお身の上にもかゝはりませうぞ。ヤアいよ〳〵胡亂者。なか〳〵大抵では白狀致すまい。ソレ申合せた通り。増合點でござると一間へ駈入り。一子由松を引立て出で。詞サア義平。長持の中はともあれ。鹽冶浪人一統にかたまり。師直を討つ密事の段々。汝よく知つらん。ありやう



に云へばよし。云はぬと忽ち悴が身の上。地コリヤ是を見よと抜刀。稚き咽に差付けられ。はつとは思へど色も變ぜず。詞ハヽヽヽ女童を責めるやうに。人質取つての御詮議。天河屋の義平は男でござるぞ。子にほだされ存ぜぬ事を。存じたとは得申さぬ。嘗て何にも存ぜぬ。知らぬ。知らぬと云うたら金輪奈落。憎しと思はゞその身體。我が見る前で殺した殺した。テモ胴性骨の強い奴。管槍鐵砲鎖帷子。四十六本の印迄調へやつたる汝か。知らぬと云うて云はしておかうか。白狀せぬと一寸試し一分刻みに刻むが何と。ヲヽ面白い刻まれう。武具は勿論。公家武家の冠烏帽子下女小者が藥沓まで。買調へて賣る商人。それ不思議とて御詮議あらば。日本に人種はあるまい。一寸試しも三寸繩も。商賣故に取らるゝ命。惜しいとも思はぬサア殺せ。悴も目の前突け〳〵。地一寸試しは腕から切るか胸から裂くか。肩骨脊骨も望み次第と。さし付けつき付け我が子をもぎ取り。子にほだされぬ性根を見よと。締殺すべきその氣相。詞ヤレ聊爾せまい義平殿。暫し〳〵と長持より。地大星由良之助義金。立出づる體見てびつくり。捕手の人人一時に。十手取縄打捨ててヲシ遙か。下つて座を占むる。地威儀を正して由良之助義平に向ひ手をつかへ。詞扨々驚入つたる御心底。地泥中の蓮。砂の中の金とは貴公の御事。さもあらんさもさうずと。見込んで頼んだ一大事。この由良之助は微塵聊か。お疑ひ申さねども。詞馴染近付きでなきこの人々。四十人餘の中にも。天河屋の義平は生れながらの町人。今にも捕へられ詮議に逢はば。如何あらん。何とか云はん。殊に寵愛の子もあれば。子に迷ふ親心と評議區々。案じに胸も休まらず。地所詮一心の定めし所を見せ。古朋輩の者どもへ安堵させん爲。せまじき事とは存じながら右の仕合。魚忽の段は眞平々々。詞花は櫻木。人は武士と申せども地いつかな〳〵武士も及ばぬ御所存。百萬騎の强敵は防ぐとも。左程に性根はすはらぬもの。貴公の心を借受け我が手本とし。敵師直を討つならばたとへ。巖石の中に籠り。鐵洞の内に隱るゝともやはか仕損じ申すべき。詞人ある中にも人なしと申せども。町家の中にもあればあるもの。地一味徒黨の者どもの爲には。產土とも。氏神とも尊み奉らずんば。御恩の冥加に。盡果てませう。詞靜謐の世には賢者も顯はれず。ヘエ、惜しい哉。地亡君御存生の折ならば。一方の旗大將。一國の政道。お預け申したとて惜しからぬ御器量。詞是に並ぶ大鷲文吾矢間十太郎を始め。小寺高松堀尾板倉片

山等潰れし眼を開かする。地妙薬名露の心魂。有難し〳〵と退つて三拜人々も。無骨の段眞平と畳に。頭をすり付くる。詞ヤレそれは御迷惑。お手上げられて下さりませ。惣體人と馬には。乘つて見よ添うて見よと申せば。お馴染ないお方々は氣遣ひに思召すも尤も。私もとは輕い者。お國の御用承つてより。經上つたこの身代。判官様の様子承つて俱に無念。何卒この恥辱雪ぎやうはないかと。力んで見ても案龜のじだんだ。及ばぬ所と存じた所へ。由良之助様のお頼みこそ心得たと向ふ見ず。俱にお力付けるばかり。地情ないは町人の身の上。手一合でも御扶持を戴きましたらば。この度の思し立。袖裾に取付いてなりともお供し。いづれも様へ息つぎの。茶水でも汲みませうに。詞それも叶はぬは。よく〳〵町人はあさましいもの。是を思へば御主の御恩。刀の威光は有難いもの。地それ故にこそお命捨てらるゝ。お義しう存じまする。猶も冥途で御奉公お序に義平めが。志もお取成と篤き詞に人々も。思はず涙催して奥歯かみ割るばかりなり。地由良之助とりあへず。詞今晩鎌倉へ出立。本望遂ぐるも百日とは過すまじ。承れば御内證まで省き給ふ由重々のお志。追付それも呼返させ申さん。地御不自由も今暫くッシはやお暇と立上がる。地ヤレ申さばめでたい旅立。いづれも様へ御酒一つ。詞いやそれは。ハテ拠祝うて手打の蕎麥切。ヤ手打とは吉左右。然らば大鷲矢間の御兩人は後へ殘り。先手組の人々は。郷右衛門力彌を誘ひ。佐太の森迄お先へ。地いざこなたへ亭主が案内。御辭儀は無禮と由良之助オクリ二人をへ伴ひ入る月と。ハルッシ又出る月と。二つ輪の親と夫との中に立つ。長地おそのは一人小提燈暗き思ひも子故の闇。あやなき門を打叩き。詞伊五よ伊五よと呼ぶ聲が。地寢耳にふつと阿呆は駈出で。詞俺呼んだは誰ぢや。化生の者か迷ひの者か。イヤそのちやこ開けて呉れ。さう云うても氣味が悪い。必ずばあと云ふまいぞと。地云ひつゝ門の戸押開き。エ、詞おえさんかようござんしたの。一人歩きをするとナ。病犬が嚙むぞえヲ、犬になりとも嚙まれて死んだら。今の思ひはあるまいに。おりや去られたわいやい。どんな事にならんしたなア。旦那殿は寢てか。イ、エ。留守か。イ、エ。何の事ぢやぞやい。何の事やらわしも知らぬが。宵の口に猫が鼠を取つたかして。捕つた〳〵と大勢來たが。ちやつと俺は浦園被つたればつひ寢入つた。今そのわろ達と奥で酒盛。ざゝんざやつてござんす。ハテエ合點のいかぬさうして坊は寢たか。アイ是はよう寢てござんす。旦那殿

と寢たか。イヽエ。われと寢たか。イヽエ。つひ一人ころりと。なぜ伽して寢さしてくれぬ。それでもわしにも旦那樣にも。乳がないと云うて泣いてばかり。ヘエヽ可愛やさうであろさうである。地そればつかりがほんの事と ッシわつと泣出す門の口。空に知られぬ ッシ雨の足かはく。袂もなかりける。詞ヤイ〳〵伊五め何處にをると。地呼立て出づる主の義平。アイアイ此處にと駈入る後。尻目にかけてたはけめが。詞奥へいて給仕ひろげと。叱り追ひやり門の戸を。さすを押へて。コレ旦那殿。云ふ事があるこゝ開けて。地イヤ聞く事もなし云ふ事も。内證一つの畜生め。穢らはしいそこ退かう。詞イヤ親と一所でない證據。それ見て疑ひ晴れてたべと。地戸の際よりも投込む一通。拾ひ取る間に付込む女房。夫は書物一目見て。詞コリヤ最前やつた暇の狀。是戻してどうするのぢや。どうするとは聞えませぬ。親了竹が惡計は。常からよう知つての事。たとへどのやうな事があるとて。なぜ暇狀は下さんした。詞持つて戻ると嫁らすと。思ひも寄らぬ拵へ。嬉しい顏で油斷させ鼻紙袋の去狀を。盜んでわしは逃げて來ました。お前は由松可愛ないか。去つてあの子を繼母に。かける氣かいの胴慾なと。すがり歎けば。詞ヤアその恨逆ねぢ。この家を去なす折。言含めたを何と聞いた。樣子あつて其方に暇やるでなし。暫しの間親里へ歸つて居よ。男了竹。もと九太夫が扶持人。地心解けねば仔細は云はぬ。病氣の體にもてなし。起臥も自由にすな。櫛も取るなと言付けやつた事なぜ忘れた。詞さんばら髪でをる者を。嫁に取ろとは云はぬはやい。地なんの汝が由松が可愛かろ。詞畫は一日阿呆めが。欺しすかせど夜になると。母樣〳〵と尋ねをる。母は追付けもうこゝへと。地欺して寢かせどよう寢入らず。叱つて寢かそと揶付け。恐い顏すりや聲上げず。詞しく〳〵泣いてをるを見て。身節が碎けて堪へられるものぢやない。地是を思へば親の恩子を持つて知るといふ。不孝の罰と我が身をば。悔んで夜とともッシ泣明かす。詞昨夜も三度抱上げて。もう連れていこ。抱いていこと。門口迄出たれども。一夜で堪能するでもなし。五十日ひまどるやら。百日隔てて置かうやら。知れぬ事に馴染ましては。後の難儀と五町三町。地搖り歩いて揶付け。寢さしてはそつとこかし。我が肌付くれば現にも。乳を探してしがみ付き。僅かな時の別れでさへ。戀焦るゝもの一生を。引分けうとは思はねども。詞是非に及ばず暇の狀。了竹へ渡せしを。内證にて受取つては。親の赦さぬ不義の科。心よか

らず持つて歸れ。これ迄の緣。約束事。死んだと思へば事すむと。地切離れよき男氣は。常を知る程ッシ猶悲しく。詞この家に居るとお前が立たず。家へいぬると嫁入らにやならず。地悲しいものは私一人。詞是が別れにならうも知れぬ。地由松を起して一寸逢はして下さんせ。詞イヤそれはならぬ。今逢うて今別るゝその身。後の思ひが猶不便な。地わけて今宵はお客もある。くど〳〵云はずと早くおいきやれ。それでも一寸由松に。詞ハテ扨未練な。後の離儀を思はずやと。地無理に引立て去狀も俱に渡して門口へ心强くも突出し。子が可愛くば了竹へ詫言たてて春迄も。隱まひ置はゞ思案もあらん。地それ叶はずば是限りと門の戸しめて内ッシに入る。地ナウそれが叶ふ程なれば。この思ひはござんせぬ。情ないぞや我が夫。詞科もない身を去るのみか。我が子にまで逢はさぬは。あんまりむごい胴慾な。顏見る迄はなんほでも。いなぬ〳〵と門打叩き。詞情ちや。慈悲ちや。こゝ開けて。地寢顏なりとも見せてたべ。ハレ手を合せ拜みます。むごいわいのとッシどうど伏し前後不覺に。泣きけるが。地ハア恨むまい歎くまい。詞なまなかに顏見たら。母樣かと取付いて。離しもせまいし離れもなるまい。地今宵いぬれば今宵の嫁入。明日迄待たれぬわしが命。さらばでござるさらばやと。云うては戸口へ耳を寄せ。もしや我が子の聲するか。顏でも見せてくれるかと。窺ひ聞けど音もせず。アヽ是非もなや是迄と思切つて駈出す向うへ。目ばかり出した大男道を塞いで引捕へ。是はと云ふ間も情なやすらりと拔いて島田髷。根よりふつと切取つて懷迄をひつさらへ。いづくともなく逃行きしハズミッシ無法無意氣ぞ是非もなき。地ナウ憎や腹立や。何物かむごたらしう髮切つて。書いた物まで持つていんだ。櫛笄の盗人なら。いつそ殺して〳〵と泣叫ぶ。聲に驚き義平は思はず駈出ししが。ハアこゝが男の魂の亂口よとくひしばり。躊躇ふ中に奥よりも。詞御亭主御亭主。地義平殿と立出づる由良之助。詞段段御親切の御馳走。お禮は鎌倉より申越さん。猶跡荷物の儀。早飛脚をもつてお賴み申す。夜の明けぬ中はやお暇。いかさま。今暫しと申されぬ刻限。道中御健勝で。御吉左右相待ちまする。着致さば早速書翰をもつてお知らせ申さう。返す〴〵もこの度のお世話。詞でお禮は云盡くされませぬ。ソレ矢間大藏御亭主へ置土產。地はつと文吾重太郎。扇を時の白臺と乘せて出したる一包。詞是は貴公へ是は又。御内室おその殿へ。些少ながらと差出す。地義平はむつと顏色變り。詞

詞で云はれぬ禮とあれば。イヤコレ禮物受けうと存じ。命がけのお世話は申さぬ。町人と見侮り。小判の耳で面はるのか。イヤ我々は裝婆の暇。貴殿は殘るこの世の宿緣。御臺顏世御前の儀もお賴み申さんため。地寸志ばかりと云殘し。ッシ表へ出づれば猶むつと。詞性根魂を見違へたか。踏付けた仕方あた忌々し。地穢らはしいと包みし進物蹴飛せば。包解けて中よりばらり女房駈寄り。詞コレわしが櫛笄切られた髮。ヤア〳〵〳〵この一包は去狀。ホイ扨は最前切つたのは。ホウこの由良之助が大鷲文吾を裏道より廻らせ。根よりふつつと切らした心は。いかな親でも尼法師を。嫁入らさうとも云ふまいし。嫁に取る者なほあるまい。その髮の延びる間も凡そ百日。我々本望を遂げるも百日は過ごさじ。討果せた後めでたく祝言。その時には櫛笄。その切髮を添に入れ。地笄髷の三國一まづそれ迄は尼の乳母。詞一季半季の奉公人。その肝煎は大鷲文吾同じく矢間重太郎。地この兩人が連中へ大事に洩れぬといふ請判。由良之助は冥途から仲人致さん義平殿。詞ハアヽ重々のお志。お禮申せ女房。地私がためには命の親。詞イヤお禮に及ばず。返禮と申すも丸牛が一毛。義平殿にも町人ならずば。俱に出立とのお望幸ひかな。豫て夜討と存ずれば。敵中へ入込む時。貴殿の家名の天河屋を直に夜討の合詞。天とかけなば河と答へ。地四十人餘の者共が。天よ。河よと申すなら。詞貴公も夜討にお出も同然。義平の義の字は義臣の義の字。平はたいらかたやすく本望。地はやお暇と。立出づる。末世に天を山と云ふ。由良之助が孫呉の術。忠臣藏ともいひはやす。裝婆の詞の定めなき別れ〳〵て。三重へ出でて行く

第十一

地柔能く剛を制し弱よく强を制すとは。張良に石公が傳へし祕法なり。鹽冶判官高定の家臣。大星由良之助之を守つて。既に一味の勇士四十餘騎漁船に打乘つて。苫深々と稻村が崎の油斷を賴みにて。ッシ岸の岩根に漕寄せて。コハリまづ一番に打上ぐるは。大星由良之助義金。二番目には原鄕右衛門。第三番目は大星力彌。ナホス後に續いて竹森喜多八片山源太。先手後船段々に列を亂さずコハリ立出づる。奥山孫七須田五郎。着たる羽織の合印。いろはにほへとッシと立並ぶ。地勝田早見遠の森。音に聞えし片山源太。大鷲源吾かけやの大槌提げ〳〵。詞吉田岡崎ちりぬるをわか手は小寺立川甚兵衛。不破前原深川彌次郎。地得たる半弓手挾んで。上るは川瀨忠太夫ッシ空に蟬く。大星瀨平。

よたれ。そつねならむうゐの。奥村岡崎小寺が嫡子。中村矢島牧平賀やまけふこえて。朝霧のフシ立並びたる蘆野や背野。千葉に村松村橋傳治。鹽田赤根は長刀構へ。江戸ハル中にも磯川十文字。遠松杉野三村の次郎。木村は用意の繩梯子。千崎彌五郎ナホス堀井の彌惣。同彌九郎遊所の酒にゐひもせぬ。コハリ由良之助が智略にて八尺ばかりの大竹に。弦をかけてぞ持ちたりける。後陣は矢間重太郎。はるか後より身を卑下し。出づるは寺岡平右衛門。假名賀名袖印。フシその數四十六人なり。地銀袴に黒羽織忠義の胸當。打揃ふ。實に忠臣の假名手本義心の手本義平が家名。詞天と河との合詞忘るな豫ての云合せ。矢間千崎小寺の面々。悴力彌を始めとし表門より入れ〳〵。郷右衛門と某は裏門より込入つて。地相圖の笛を吹くならば時分はよしと乘込めよ。取るべき首は只一つと。由良之助に下知せられ怒りの眼一時に。舘をはるかに睨付け裏と表へ三軍へ別れ行く。フシかくとは知らず。地高武藏守師直は。由良之助が放埓に心もゆるむ油斷酒。藝妓遊女に舞ひ歌はせ。藥師寺を上客にて身の程知らぬ大騒ぎ。はては雜魚寢の不行儀に前後も知らぬ寢入りばな。非常を守る番人のフシ拍子木のみぞ殘りける。地表裏一度に手筈を極め。矢間千崎不敵の二人。表門に忍寄り內の樣子を窺へば。夜廻りとおぼしき拍子木環音をさせばよい折と。例の嗜む繩梯子。高塀に打掛け打掛け雲井までもとさゝがにの登り了せた塀の屋根。早拍子木の近づく音ひらりと下りるを見付けし番人。スハ何者と駈寄るを取つて引伏せ高手小手。よい案內と息をとめ繩先腰にひつかけて。拍子木奪ひかつちかち。役所々々を打廻り窺ひ廻るぞ。フシ不敵なる。地早裏門に呼子の笛。時分はよしと兩人は。拍子木合せて天河と。貫の木はづして大門をくわらりと開けば力彌を始め。杉野木村三村の一黨我も我もと込入つて。見れば一面雨戶の固め父が教へし雪折は。こゝぞと下知して丸竹

に弦をかけたを雨戸の鴨居。敷居にはさんで一時に。ひいふう三つの拍子にてかけたる弦をてうど切れば。鴨居は上り敷居は下り雨戸はづれてばた〳〵〳〵。そこへ乗込めと天河の ッシ聲響かして亂れ入る。地スハ夜討ぞと松明提燈裏門よりも込入つて。一方は郷右衛門一方は由良之助。床几にかゝつて下知をなす。小勢なれども寄手は今宵必死の勇者。祕術を盡くせば由良之助。詞餘の者に目なかけそたゞ師直を討取れと。地郷右衛門諸共に八方に下知すれば。はやりをの若者ども揉みたて揉みたて。三家へ切結ぶ。地北隣は仁木播磨守南隣は石堂右馬之丞。兩隣より何事かと家の棟に武者を上け ッシ提燈星の如くにて。詞ヤア〳〵御屋敷騒動の聲太刀音矢叫び事騒がしく。狼藉者か盗賊か。地但し非常の沙汰なるか。承り屆けよと。主人申付けられしと ッシ高らかに呼ばはつたり。地由良之助とりあへず。詞是は鹽冶判官が家來の者ども。主人の仇を報はんため。四十餘人の者どもが千變萬化の戦。かく申すは大星由良之助原郷右衛門。尊氏御兄弟へお恨なし。もとより兩隣仁木石堂殿へは何の遺恨も候はねば。卒爾致さんやうもなし。火の用心は堅く申付けたれば。是もつて御用心には及ばぬ事。只穩便に捨ておかれよ。それとても隣家の事聞捨てならず加勢あらば。力なく一矢仕らんと高聲に答へたり。地兩家の人々聞屆け御神妙御神妙。我人主人持つたる身は

もつとも斯くこそあるべけれ。御用あらば承らん。提燈引けと一時に。靜まり返つて控へける。地一時ばかりの戰に寄手は僅か三四人。薄手負ふたるばかりにて。敵の手負は數知れず。されども大將師直とおぼしき者もなき所に。足輕寺岡平右衛門。館の内を飛廻り。詞部屋々々は勿論上は天井下は簀子。井の中迄槍を入れて探せども師直が行方知れず。縫間とおぼしき所を見れば夜著蒲團の温り。この寒夜にさめざるは逃げて間なしと覺えたり。地表の方が氣遣はしと駈行くを。ヤレ平右衛門待て〳〵と。矢間重太郎重行師直を宙に引立てコレ〳〵いづれも。詞柴部屋に隱れしを見付け出して生捕しと。地聞くより大勢花に露。いき〳〵勇んで由良之助。詞ヤレでかされた手柄々々。さりながらうかつに殺すな。かりにも天下の執事職殺すにも禮儀ありと。地受取つて上座に据ゑ。詞我々陪臣の身として。御館へ踏込み。狼藉仕るも主君の仇を報じたさ。慮外の程はお赦し下され。御尊常に御首を賜はるべしと相述ぶれば師直も流石にゑせ者わろびれもせず。ヲヽ尤も〳〵。詞覺悟は豫てサア首取れと。地油斷さして拔討にはつしと切る引つぱづして腕ねぢ上げ。詞ハアヽしをらしき御手向ひ。サアいづれも。日頃の鬱憤この時と。地由良之助が初太刀にて四十餘人が聲聲に。浮木に逢へる盲龜は是。三千年の優曇華の花を見たりや嬉しやと。躍上り飛上り形見の刀で首かき落し。喜び勇んで舞ふもあり。妻を捨て子に別れ老いたる親を失ひしも。この首一つ見んゑ爲よ今日はいかなる吉日ぞと。首を擲いつ食付きつ一同にわつと嬉し泣き。理すぎて哀なり。地由良之助は懷中より亡君の位牌を出し。床の間の卓に乘せ奉り。師直が首血潮を清め手向け申し。兜に入れし香を炷き。フシ退つて三拜九拜し。地恐れながら。亡君尊靈蓮性院見利大居士へ申上げ奉る。詞去る御切腹のその折から。跡弔へと下されし九寸五分にて師直が首かき落し。御位牌に手向け奉る。地草葉の蔭にて御受取り下さるべしと涙とともに禮拜し。詞いざ〳〵お一人づつ御燒香。まづ惣大將なれば御自分樣より。イヤ拙者よりまづ先へ。矢間重太郎殿御燒香なされ。イヤ〳〵それは存じもよらず。いづれもの手前と申し。御最屓は却つて迷惑。イヤ最屓でござらぬ。四十人餘の衆中が師直の首取らんと。一身を抛つ中に貴殿一人。柴部屋より見付け出し生捕になされたは。よく〳〵主君鹽冶尊靈の。お心に叶ひし矢間殿。お羨しう存ずる。何といづれも。御尤もに存じまする。それは何とも。ハテ扨刻限が延びます。地

然らば御免とッシ一の燒香。地二番目は由良殿。いざ御立と勸むれば。詞イヤまだ外に燒香の致し手あり。そりや何者誰人と。地問へば大星懐中より壽盤縞の財布取出し。詞是が忠臣二番目の燒香。早野勘平が成れの果。その身は不義の誤りから一味同心も叶はず。せめては石碑の連中にと女房實つて金調へ。その金故に舅は討たれ金戻され。詮方なく腹切つて相果てし。その時の勘平が心さぞ無念にあらう口惜しからう金戻したは由良之助が一生の誤り。不便な最期とけさしたと。片時忘れず肌離さず。今宵夜討も財布と同道。平右衛門汝が爲には妹婿。地燒香させよと投げやれば。ハヽヽヽはつと押戴き〳〵。草葉の蔭よりさぞ有難う存じましよ。冥加に餘る仕合と。財布を香爐の上に著せ。詞二番の燒香早野勘平重氏と。地高らかに呼ばはり。聲も涙に震はすれば。列座の人も殘念のッシ胸も。張裂くばかりなり。詞思ひがけなや人馬の音。山谷に響く攻太鼓ッシ閧をどつとぞ上げにける。地由良之助ちつとも騷がず。詞扨は師直が一家の武士取りかけしと覺えたり。地罪つくりに何かせんと覺悟の所へ。桃井若狹之助遲ればせに駈付け給ひ。詞ヤア〳〵大星。今表門より攻めかけたは。師直が弟師安。この所で腹切つては。敵に恐れしと後代迄の譏。鹽冶の御菩提所光明寺へ立退くべしと。地仰せにはつと由良之助。詞いかさま最期をとぐるとも亡君の墓の前。仰せに隨ひ立退き申さん。御しつばらひ賴み上ぐると。地云ふ間もあらせずいづくに忍び居たりけん。藥師寺次郎鷲坂伴内。おのれ大星遲さじと右往左往に討つてかゝる。力彌すかさず受流し〳〵。詞暫時が中は討合ひしが。はずみを打つて討つ太刀に。地袈裟にかけられ藥師寺最期。かはす二の太刀足切られ尾にもつがれず鷲坂伴内。その儘息は絶えにける。地ヲヽ手柄々々と賞美の詞。末世末代傳ふる義臣。是も偏に君が代の。久しき例竹の葉の榮を。こゝに書殘す

寛延元年辰八月十四日

作者　竹田出雲　三好松洛　並木千柳